

中学校 防災教育年間計画 (例)

◆ 3 学年の目標

- ・ 災害時等の非常時にも、地域社会の一員として、自主的に地域の活動に参加できるようになる。

◆ 主な指導内容

- ・ 災害に応じた安全な避難、日常の備え（ア） パニックの防止と安全な行動、避難所の役割（イ）
地域防災訓練への参加、自主的な組織活動（ウ）

1 学期	2 学期	3 学期
◇ 私たちと国際社会の諸課題（社会科） ◇ ボランティア活動などの社会参加（生徒会活動） ◇ 「避難訓練（竜巻想定）（学校行事）」【展開例⑩】	◇ 「災害後の暮らし」ボランティア活動の意義の理解と参加（学級活動）【展開例⑧】 ◇ 緊急地震速報を活用した訓練（学校行事）【展開例⑨】	◇ 自然の恵みと災害（理科）【展開例②】 ◇ 「クリーン作戦・全校美化活動、地域ボランティア活動」（高齢者配食サービス）（生徒会活動）

◆ 2 学年の目標

- ・ 応急手当の技能を身に付け、自己の安全ばかりでなく他の人々の安全にも配慮できるようになる。

◆ 主な指導内容

- ・ 災害の特徴、傷害の防止（ア） 災害時の初期対応、安全な行動の仕方、応急手当（イ） ボランティア活動の意義と理解（ウ）

1 学期	2 学期	3 学期
◇ 身近な地域の歴史（社会科） ◇ 気象とその変化（理科） ◇ 自然と郷土（社会科）【展開例①】 ◇ 「くらしの安全を守る」職場体験学習における防災学習（総合的な学習の時間）【展開例⑦】 ◇ 「避難訓練（竜巻想定）」（学校行事）【展開例⑩】	◇ 自然災害による傷害の防止（保健体育科）【展開例③】 ◇ 衣生活・住生活と自立（技術・家庭科） ◇ 「緊急地震速報を活用した訓練」（学校行事）【展開例⑨】	◇ 現代の日本と世界（社会科） ◇ ボランティア活動の意義の理解と活動時の安全（学級活動） ◇ クリーン作戦・全校美化活動、地域ボランティア活動（生徒会活動）

◆ 1 学年の目標

- ・ 防災に関する日常の備えを見直し、災害に対して適切な行動ができるようになる。

◆ 主な指導内容

- ・ 災害の発生とメカニズム、自然体験教室（ア） 情報収集の仕方、防災避難訓練（イ） 通学路の確認、地域の活動に参加する（ウ）

1学期	2学期	3学期
◇世界の様々な地域（社会科） ◇「地域ボランティア団体による講話」（学級活動） ◇「避難訓練（竜巻想定）」（学校行事）【展開例⑩】 ◇「遠足・宿泊学習」（学校行事）	◇大地の成り立ちと変化（理科） ◇安全・安心な生活のための技術（技術・家庭科）【展開例④】 ◇「緊急地震速報を活用した訓練」（学校行事）【展開例⑨】	◇「過去が光って見えるとき」人間愛、思いやりの心（道徳）【展開例⑤】 ◇「クリーン作戦・全校美化活動、地域ボランティア活動の体験」（資源ごみの回収等）（生徒会活動）

* 3年間を見通した総合的な学習の時間での防災教育計画の例【展開例6】

中学校展開例 1

自然と郷土

1 教科等名

社会科（2年）

【地理的分野（2）日本の様々な地域

ウ日本の諸地域（ア）自然環境を中核とした考察】

2 ねらい

自然環境が地域の人々の生活や産業などと深い関係をもっていることや地域の自然災害に応じた防災対策が大切であること等について考えさせる。

3 指導計画

（6時間 展開例5～6／6）

（1）テーマ設定：何を中核に、私たちの住む「〇〇」地方の特色を捉えるか。
（1時間）

（2）自然と生活：自然環境が、そこでの生活にどのような影響を与えているか。
（1時間）

（3）自然と産業：自然環境は、地域の産業とどのような関わりがあるか。
（1時間）

（4）自然と防災：自然環境は、地域の防災対策にどのような影響を与えているか。
（1時間）

（5）自然と郷土：自然環境を中核に、この「〇〇」地方の地域的特色をまとめよう。
（2時間）

本単元「（ア）自然環境を中核とした考察」を、「ウ日本の諸地域」の学習のまとめとして位置付け、「郷土」をキーワードとして、次時以降で展開する、地理的分野の集大成となる「エ身近な地域の調査」に結び付けるねらいをもたせている。

それとともにここでは、地域の地形や気候などの自然環境に関する特色ある事象を中核として、それを人々の生活や産業などと関連付け、自然環境が地域の人々の生活や産業などと深い関係をもっていることや、地域の自然災害に応じた防災対策が大切であることなどについて考えさせることもねらいとしている。

4 展 開 (2時間配当)

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 自分たちが住んでいる地方の産業の特色を白地図にまとめてみよう。 2 産業と自然や、暮らしと自然との関わりについて整理しよう。 ◇それぞれの産業は、○○地方の自然とどのような関わりをもっているだろう。 ・第一次産業は自然と直結している産業であり、地域ならではの産業として、第二次産業、第三次産業の地域的特色に結び付くものであり、第一次産業あつての、第二次、第三次産業であることなど、自然と産業の結び付きは非常に強い。 ◇わたしたちの暮らしと自然とはどのような関わりがあるだろう。 ・わたしたちの住む街も、自然が形作った地形の上に広がっており、生活全般において大きな影響を与えていることなど、強い結び付きをもつ。 3 自然の営みがもたらす恵沢と脅威について考察する。 ・自然災害の動画を視聴。 4 自然とともに生きるわたしたちが、その恵沢を受けながら安心して生活していくために必要なことを考える。 ◇郷土と自然を大切にしつつ、安心して暮らしていくためにどんなことが必要だろうか。	○既習内容の復習により想起させる。 ○各地の産業が、自然と深い関わりがあることに気付かせる。 ○輸入に頼っている産業等については、必要に応じて、補足する（なぜ輸入に頼らざるを得ないか）。 ○自然現象が作り出す偶然の上に、私たちの生活が成り立っていることに気付かせる。 ○短絡的な「環境決定論」に陥らぬよう留意させる。 ○自然現象に人間の営みが巻き込まれると「災害」となることを理解させる。 ○自然現象からは逃れられないが、災害から命を守ったり、被害を最小限にとどめたりする（減災）ことに気付かせる。 ○次時以降学習する「身近な地域の調査」の予告として位置付け、郷土を愛する態度についても意識付ける。	・ノート、地図帳 ・都道府県、市区町村の統計資料、Webページなど 自然環境を生産面だけでなく、運搬、流通、消費等幅広い観点から捉えさせる。 歴史的な資料もあれば活用する。 第三次産業としては特に観光（自然景観、歴史景観だけでなく、温泉、スキー等のレジャーも）を取り上げる。 地形図や旧地形図等 気象庁のデータ等 ・総務省消防庁「チャレンジ！防災48」「東日本大震災」等の映像 自分たちの地域の歴史・伝統や、他地域とのつながりも意識することができると資料の取扱いを行い、環境保全や安全・安心なまちづくりに参画できる姿勢を養う。

5 評 価

地域の自然環境と生活や産業との関係に基づき、地域にあった防災対策を考えることができたか。

6 そ の 他

参考

・総務省消防庁「チャレンジ！防災48」

<http://open.fdma.go.jp/e-college/bosai/index.html>

中学校展開例2

自然の恵みと災害

1 教科等名

理科（3年）

【第2分野（7）自然と人間 イ自然の恵みと災害（ア）自然の恵みと災害】

2 ねらい

- （1）自然がもたらす様々な恵みや災害を調べ、自然の変化の特徴を理解し、自然を多面的、総合的にとらえ、自然と人間のかかわり方について考察させる。
- （2）自然から受ける様々な恵みと地域の自然災害や地球規模の自然災害のようすを調べさせる。
- （3）広く情報を収集して様々な視点から考察させ、自然と人間のかかわり方について適切に判断する能力や態度を身に付けさせる。

3 指導計画

（3時間 展開例2／3）

- （1）自然がもたらす恵みや災害～地震・火山災害～（1時間）
- （2）自然がもたらす恵みや災害～気象災害～（1時間）
- （3）自然とともに歩む～防災対策～（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 過去に日本でどのような風水害があったか、話し合う。 ・平成24年九州北部豪雨など ・VTR1視聴（1分20秒）	○生徒の経験から振り返らせ、VTRで補足する。	・「災害から命を守るために～防災教育教材(中学生用)～」(文部科学省、H21.3) VTR1「台風・大雨・竜巻による被害」 ・同上VTR2「台風・大雨・竜巻の発生メカニズム」 気象庁がこれまでに命名した気象災害等(気象庁Webページ)
2 台風、大雨、雷、竜巻などはどのようにして発生するか、メカニズムを既習内容から考える ・積乱雲が発達 ・熱帯の海上で台風は発生 ・VTR2視聴（1分30秒）	○2年次「天気とその変化」で学習した低気圧や前線を思い出させ、VTRで補足する。	平成24年竜巻被害の例 ・ワークシート
3 災害からの身の守り方を考える。 ◇台風、大雨、雷、竜巻などが起こったときには、どのような危険が予想され、どのように身を守ればよいのだろうか。	○ワークシートを配布し、個人で記入させ、災害の特色や対応などグループで話し合う。	地域の過去の災害記事など。

(災害の特色など) ・強い風や突風が吹いて物が飛ばされる。 ・雷の音が聞こえる。雷の光が見える。落雷が発生する。 ・沿岸部では高波、高潮が発生する。 ・川が増水したり、堤防が決壊したりして洪水が起きる。 ・がけ崩れや土砂崩れが発生して道路が寸断したり、家屋が押しつぶされたりする。 (災害への対応など) ・河川や海岸に近づかないほうが良い。 ・むやみに外に出ない。 ・テレビやインターネットで情報を集める。 ・行政の避難勧告等に注意する。 ・学校や家の近くの危険場所を知っておく。 ・VTR3視聴（2分50秒）	○グループごと発表させる。	
4 自分たちの住む地域が台風、大雨、雷、竜巻などに備えるためにどんな防災活動ができるか、話し合う ・VTR4（1分50秒）、VTR5（1分30秒）視聴。 ・過去に洪水等が起こりやすい場所を調べる。 ・土砂崩れ等が起こりやすい場所を調べる。 ・地図にまとめることもできる。 ・避難するときのルートを決めておく。 ・避難所などになったとき、積極的に手伝うことも大事。	○VTR4、5を先にみせ、一般的な備えや先進的な取組を紹介する。その後、自分たちの地域でできることを考えさせる。	・同上VTR3「台風・大雨・竜巻が引き起こす災害」各地域の气象台の情報（Webページ）活用 ・同上VTR4、5「風水害に備える」「水害の教訓を活かした防災活動」行政が発行したハザードマップの活用 学校周辺の地形図、など

5 評価

地域にもたらされている自然の恵みや地域に起こりやすい自然災害を理解し、予想される自然災害に対する対策を考えることができたか。

6 その他

參考資料

- ・「災害から命を守るために～防災教育教材（中学生用）～」(文部科学省 H21. 3)
- ④気象災害（風水害）「強い風や雨に注意しよう」
- ⑤気象災害（落雷）「雷をあなどるな！」
- ・気象庁参考資料「急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう！」(H25. 3予定)

<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/index.html>

中学校展開例3

自然災害による傷害の防止

1 教科等名

保健体育科（2年）

【保健分野（3）傷害の防止 ウ自然災害による傷害の防止】

2 ねらい

- （1）自然災害による傷害は、例えば地震が発生した場合に家屋の倒壊や家具の落下・転倒などによる危険が原因となって生じること、また、津波・土砂崩れ・地割れ・火災などによる二次災害によっても生じることを理解させる。
- （2）自然災害による傷害の防止には、日頃から災害時の安全の確保に備えておくこと、周囲の状況を的確に判断し、冷静・迅速・安全に行動すること、災害情報を把握する必要があることを理解させる。

3 指導計画

（2時間 展開例2／2）

- （1）自然災害発生による傷害と二次災害による傷害（1時間）
- （2）自然災害への備えと傷害の防止（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等◇	教職員の支援	資料等
1 自然災害における被害や傷害について考える。 自然災害（地震）への対応と備えについて学習しよう 2 過去の大地震から、地震で予想される被害を考える。 ・各自で予想される被害を付箋紙に記入した後、グループで発表する。	○前時の復習をし、自由に発表できるよう配慮する。 ○各自が考えた予想される被害を付箋紙に書かせる。 ○グループをつくり、出された被害を分類させる。 ○東日本大震災に関する資料を提示し、予想した被害を確認させる。 ○資料やVTRを視聴することにより、不安を感じる生徒に配慮する。	ワークシート 付箋紙 東日本大震災に関するVTRや資料

3 被害を最小限にとどめるための行動を考える。 ①とるべき行動 ②何を備えておくのか ③情報の収集方法	○災害発生時と二次災害の発生時の両面から考えるよう助言する。 ○グループで、①②③について話し合いをさせる。 ○避難時に優先することを考えさせる。 ○非常持ち出し袋等についても考えさせる。 ○ライフラインが断たれている状況も予想させる。 ○これらの行動や備えが、被害の拡大や傷害を防ぐ大きなカギとなることを理解させる。	「災害から命を守るために～防災教育教材(中学生用)～」(文部科学省 H21. 3) ワークシート
4 「自然災害に対する心得」をまとめる。		

5 評価

- (1) 自然災害による傷害は、家屋の崩壊や家具の落下・転倒などによって生じること、また、津波・土砂崩れ・地割れ・火災など二次災害によっても生じることが理解できたか。
- (2) 自然災害による傷害の防止には、日頃から災害時の安全の確保に備えておくこと、周囲の状況を的確に判断し、冷静・迅速・安全に行動すること、災害情報を把握する必要があることを理解できたか。

6 その他

参考資料

- ・総務省消防庁ホームページ「地震による家具の転倒を防ぐには」
<http://www.fdma.go.jp/html/life/kagul.html>
- ・気象庁ホームページ「緊急地震速報を見聞きしたときには」
<http://www.seisvol.kishou.go.jp/eq/EEW/kaisetsu/knowledge/index.html>

中学校展開例 4

安全・安心な生活のための技術

1 教科等名

技術・家庭科（1年）

【技術分野 内容A 材料と加工に関する技術

（2）材料と加工法 ウ 材料と加工に関する技術の評価・活用】

2 ねらい

建物に利用されている技術の、安全性の向上等を含めた社会に果たしている役割について理解を深め、それらを適切に評価し活用する能力と態度を育成する。

3 指導計画

（3時間）

（1）建物に利用されている技術と社会との関わり（1時間）

（2）出入口・窓に利用されている技術の評価と活用（2時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 時 （1）住宅や学校等で利用されている様々な技術を探そう 材料（木材、コンクリート、アルミ、鉄…） 加工法（切断、接合、曲げ…） （2）なぜその場所にその技術が利用されているのかについて話し合おう 2～3 時 （1）出入口や窓に使用されている技術进行评估しよう！ a 教室の木製の引き戸 b アルミサッシの窓 c 非常口やマンションの金属製のドア に使用されている材料と加工に関する技術を確認し、安全性、経済性の視点から長所と短所をまとめる。	○これまでの材料と加工に関する技術に関する学習を基に見付けさせる。 ○グループで考えさせた上で、全体に発表し、各技術が様々な役割を担っていることを理解させる。 ○これまでの学習や経験から長所・短所を考えさせる。	・校舎の様々な場所の写真 ・住宅販売会社のパンフレット ※自分の家に関しては宿題として調べさせてきてもよい。 ・各製品の写真 ・評価シート

(2) 出入り口や窓に使用されている技術の活用について考えよう！ a～cの地震発生時の状況、防犯性能、室内環境の保全性能について知る。 先の情報を踏まえて、安全・安心な生活のために、a～cを「ア 使うのか使わないのか」「イ 使うとしたらどう使うのか」「ウ よりよいものとするためにはどうしたらよいか」を考える。 (3) 学習のまとめ 様々なアイデアの中から具体的に実践できるものについて話し合う。 この学習を通して感じたことをワークシートにまとめる。	○ア、イについては、防犯性能を高めると災害時に避難しにくい等の、相反する状況を想定させ、どのような使い方をしたらよいか考えさせる。 ○ウについては、より丈夫にするための材料・構造の変更等、これまでの学習に基づき考えさせる。 ○飛散防止フィルムを見せ、価格や実践するのに必要な期間など、経済性の視点から検討することも大切であることに気付かせる。 ○何人かの感想を発表させ、安全・安心な生活のために、技術の適切な評価・活用について考えとともに、できることから実践することが大切であることを意識させる。	・活用シート ・災害時の写真、防犯ビデオ ・飛散防止フィルムとその効果の映像 ・授業評価シート
--	--	--

5 評価

- (1) 建物に利用されている技術が、安全性の向上を含めて社会等に果たしている役割と影響について説明できたか。
- (2) 出入り口や窓に利用されている技術の安全面からの課題を見付け、社会的、環境的及び経済的な側面などから比較検討するとともに、適切な解決策について考えているか。

中学校展開例5

過去が光って見えるとき

1 教科等名

道徳（1年）

【2主として他の人とのかかわりに関すること（2）思いやりの心】

題材 「過去が光って見えるとき」（防災教材『幸せ運ぼう』中学校用 神戸市教育委員会）

2 主題について

（1）主題 思いやり【2－（2）】

（2）主題設定の理由

思いやりの心とは、他人の立場に立って考えることができる心であり、人間が助け合い協力し合って生きていく上で大切なものである。この心を育てるためには、地域社会において、その社会の一員として、他者とのかかわりや地域とのかかわりを積極的に持ち、自分より弱い立場の人や困っている人に対して、感謝と思いやりの心を持って生活するという、温かい人間愛の精神を深めていくことが重要である。災害時のような非常時には、このことは「生きる」ことへと直結する。阪神・淡路大震災時、神戸市の中学生のアンケートでいちばん心に残ったのは「人のやさしさ」だったというアンケート結果もある。災害時の中学生が感じたことを書いた資料を通してこのことに触れ、普段から思いやりの心を大切にする態度を養う。

3 ねらい

温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対して思いやりの心をもとうとする道徳的態度を育てる。

（災害時のような非日常の中でも、自他の命を守り、地域社会の一員として他者とのかかわりや地域社会とのかかわりを積極的にもとうとする姿勢を育てる。）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 過去の日本の災害で、大規模な避難所となったところではどんなことが大変になったか、写真から気付くことを話し合う。 ・狭くて息苦しそう。 ・寝るところもない。 ・プライバシーもなさそう。 ・トイレや食べ物が困りそう。 2 資料「過去が光って見えるとき」を読む資料から感じたことや意見を発表し合う。 ・大変な環境の中でも助け合って生活していたことに感動した。 ・自分のことだけで精一杯になってしまいがちなのに、弱い立場の人のことを考えられるなんてすばらしい。 3 体験を未来に語り継ごうとしている人たちの思いや活動を映像で知る。	○阪神・淡路大震災や東日本大震災などの大規模災害における避難所の写真を数枚見せ、イメージを膨らませる（動画があれば、それを視聴させる）。 ○資料を配布し、範読する。 ○個人で感想を書かせ、小集団で発表し合わせる。 ○ビジュアル版「幸せ運ぼう」 「共に生きる－1.17を語り継ぐ」など、体験者が語りかける映像を視聴させる。	・写真 「幸せ運ぼう（中学校用）」 読物資料 「ビジュアル版幸せ運ぼう」 映像資料

5 評 価

温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対する思いやりの心の大切さについて考えを深めることができたか。

（災害時のような非日常の中でも、自他の命を守り、地域社会の一員として他者とののかかわりや地域社会とののかかわりを積極的にもとうとする意識をもてたか。）

6 そ の 他

参考資料

- ・読物資料「幸せ運ぼう（中学校用）」神戸市教育委員会
- ・映像資料「ビジュアル版 幸せ運ぼう」神戸市教育委員会

中学校展開例6

総合的な学習の時間（防災教育）年間指導計画の例

1 総合的な学習の時間における防災教育に関わるねらい

- (1) 災害についての正しい知識と、防災の在り方について理解を深める。
- (2) 災害発生時、発生後に必要とする知識・技能を身に付ける。
- (3) 災害発生時、発生後に大切な社会性や公德心などを養い、地域の一員としての責任を自覚する。

2 学習テーマ

大規模災害に備え、「自助」「共助」「公助」を各学年のテーマとし、系統立てて実施する。(3年間で1サイクル)

- 自助：自分自身の身を守り、被害を最小限にするためにできることを考え、実践する。
- 共助：地域の防災について、その役割を知り、中学生としてできることを考え、地域の一員として責任を自覚し、実践する。
- 公助：災害時に対応する公的機関の働きや役割、情報通信網などについて理解を深めるとともに、災害発生時に自分ができることについて考え、実践する。

3 学習対象・学習事項

第1学年（自助）「災害の種類」「災害のメカニズム」「救助器具の使い方と初期消火」「簡易耐震診断」「緊急地震速報」「ハザードマップ」等

第2学年（公助）「消防署、防災施設見学」「災害時伝言ダイヤル」「応急手当」「心肺蘇生」「AED」「家庭での防災」等

第3学年（共助）「地域防災マップ」「避難所での生活」「ボランティア活動への参加」「地域防災訓練への参加」等

*各学年の内容を学ぶにあたっては、関係機関との連携や外部講師の活用、各教科の学習内容との関連を図るなどして取り組む。

4 指導計画

各学年20時間設定(次ページ参照。その他の時間は防災教育以外の内容を扱う)

	1 学 期	2 学 期	3 学 期	関連教科・領域
1 年 (自 助)	災害時の種類について知る⑤ ○火災、地震、津波、火山、台風、雷などの災害について調べる。 ・それぞれの災害の特徴 ・過去の被害・災害のメカニズム ・自分たちの地域の災害 等	対策について考える⑥ ○自分でできる対策について調べる。 ・緊急地震速報 ・住宅の簡易診断法 ・安全な場所の確保 等	実践してみる⑥ ○自分の身を守るための方法を実践する。 ・救助器具の使い方や初期消火・緊急地震速報を活用した避難訓練 まとめ③ ○日常の生活に生かせるようまとめる。 ・救助器具の使い方 ・家庭（家族）の安全 ・外出中、交通機関 等	[理科] ・大地の変化 [技術] ・材料と加工 [学校行事] ・校外学習
ポイント	関連施設見学、地域のゲストティーチャー、ICT活用	関係機関の外部講師（建築士会、消防署等）	保護者会などでの発表により 家庭での防災意識高揚に発展	
2 年 (公 助)	災害時の公的機関の働きを知る⑤ ○災害時の行政の対応や情報通信について調べる。 ・防災担当課の役割 ・過去の被害での対応 ・災害時伝言ダイヤル 等	自分でできること考える⑥ ○災害時に自分でできることを調べる。 ・応急手当 ・心肺蘇生法 ・非常持出品 等	実践してみる⑥ ○災害時に自分ができることを実践する。 ・応急手当や心肺蘇生、負傷者搬出等を組み入れた避難訓練 まとめ③ ○日常の生活に生かせるようまとめる。 ・身近にあるものでできる応急手当や負傷者搬出についてまとめる。	[社会] ・日本の様々な地域 [保健体育] ・応急手当 [学校行事] ・校外学習 ・ボランティア体験
ポイント	関連施設見学、地域のゲストティーチャー、ICT活用	関係機関の外部講師（消防署、日本赤十字社等）	保護者会などでの発表により 家庭での防災意識高揚に発展	
3 年 (共 助)	地域防災について知る⑤ ○地域防災の役割と働きについて調べる。 ・地域の避難所（場所） ・地域防災の組織 ・住民としての責務 等	自分でできること考える⑥ ○災害時に自分が地域でできることを調べる。 ・ボランティア活動 ・地域防災マップ 等	実践してみる⑥ ○災害時に自分ができることを実践する。 ・避難所での生活やそこでのボランティア活動を組み入れた避難訓練 まとめ③ ○日常の生活に生かせるようまとめる。 ・地域防災の一員としての心構えや自分の役割についてまとめる。	[家庭] ・調理実習 [学校行事] ・修学旅行 ・ボランティア体験 [その他] ・地域防災訓練への参加
ポイント	関連施設見学、地域のゲストティーチャー、ICT活用	関係機関の外部講師（社会福祉協議会、日本赤十字社ボランティアセンター等）	家庭での防災チェック 地域防災訓練への参加	
	3 年間の系統性・発展性を持たせた内容としての例示であり、1 年生では、自分自身の身を守ること、2 年生では、家庭・学校での防災、3 年生では、地域防災へと、活動や視点を広げていく内容としている。			

中学校展開例7

くらしの安全を守る（職場体験学習における防災学習）

1 教科等名

総合的な学習の時間（2年）

2 ねらい

職場体験学習をととして、各事業所など地域社会における災害（主に地震・津波 以下同じ）への備えについて理解させる。

3 指導計画

（6時間 展開例5～6／6）

- （1）災害への備え ～職場体験学習での聞き取り～ （1時間）
- （2）事業所の備えをまとめよう ～レポート作成～ （2時間）
- （3）事業所の備えを発表しよう （1時間）
- （4）わかったことをまとめよう ～事業所の備え・まとめ～ （2時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 各事業所の災害への備えを復習する。 ◇職場体験先の事業所では、災害に対してどんな備えをしていただろう。 ・避難訓練 ・従業員の研修や講座 ・防災マニュアルの整備 ・関係機関（組織）との連携	○さまざまな事業所に、それぞれの備えがあることを、前時の復習により想起させる。	各事業所の案内と防災マニュアル等
2 くらしの安全を守るためにある機関や組織について調べる。 ◇事業所の備えでも出てきた、くらしの安全を守るためにある機関や組織には、どんなものがあるだろう。 ・警察署 ・消防局 ・病院 ・市役所 ・電気事業者 ・ガス会社 ・通信事業者 ・新聞社 ・テレビ局 ・自治会（自主防災会） ◇これらの機関や組織はどこにあり、どんな役割を担っているだろう。 ・どこにあるのか（所在地） ・どのような役割を担っているのか ・どのような場面で有効に機能するのか ・自分たちの生活との接点はどこにあるのか	○前時の発表内容からわかるものから挙げさせる。 ○職場体験先の事業所になっていない関係機関や組織についても考えさせる。 ○地図などで確認しながら進める ○平時と災害時で働きが異なる機関があることに気付かせる。	ワークシート 各事業所のWebページ等 ・市広報課等発行の市街地図や2万5千分の1地形図など

3 これらの機関や組織の活動の中で、自分たちが参加できるものはないかを考察する・ ◇これらの機関や組織の活動の中で、自分にもできることはないだろうか。また、災害発生時にできることはないだろうか。 ・応急手当法や心肺蘇生法の技能講習 ・地域の自主防災訓練への参加 ・自力避難困難者への手助け	○災害時の自助・共助の必要性に気付かせる（必要な場面設定をしながら進める）。	・DIG※マップや校区防災マップなど ・地域の防災イベント等の案内
--	---	--

5 評価

事業所ごとに、さまざまな災害への備えがあることがわかったか。

6 その他

- (1) 本展開例は、キャリア教育として行われることの多い職場体験活動等の一部として想定している。本展開例に示す指導計画の前には、事前指導として、「事業所調べ」「職業人からの講話」「社会人としてのマナー」等の活動が考えられる。

- (2) 参考 「災害図上訓練DIG」

静岡県地震防災センター <http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/>

中学校展開例8

災害後の暮らし

1 教科等名

特別活動 学級活動（3年）

【1学級活動（2）適応と成長及び健康安全

カ ボランティア活動の意義の理解と参加

キ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成

2 ねらい

- （1）災害への備えの重要性について理解させ、進んで日ごろから備えようとする態度を育てる。
- （2）学校や地域の防災や災害時のボランティア活動の大切さについて理解を深めさせ、進んで参加しようとする態度を養う。

3 指導計画

（1時間）

（1）事前の指導

- ・災害に備え、自分の家庭で行っていることについて調べ、学級活動カードに記入する。

（2）本時の指導

- ・災害後の暮らしについて、映像をもとに話し合うことで、備える習慣の必要性を感じさせるとともに、自らの生活だけではなく、中学生としてボランティアなど地域に貢献することの大切さを感じさせ、実践的な態度を養う。

（3）事後の指導

- ・（一定期間後）各自が決めた「災害時の備え」の整備状況について報告し合う。

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 災害をイメージさせるVTR 1. 2. 3を視聴し、災害後の暮らしについてどのような状況が起こり得るか、話し合う。 ・電気、ガス、水道などが使えなくなる。 ・道路や鉄道が寸断され、移動が制限される。	○ライフラインが使えなくなったり、避難所での生活が余儀なくされたりする場面を映像を使って理解させ、切実感をもたせる。	・中学生用防災教育教材「災害から命を守るために」（文部科学省、H21. 3）VTR1「変わる生活」、VTR2「使え

・家で生活できなくなり、避難所で共同生活をするようになる。 2 災害後の暮らしについて考える。 ◇災害後の暮らしをよりよくするためには、中学生として家庭や地域でどのようなことができるだろうか。 〈家庭〉 ・懐中電灯やロウソク、ラジオや電池を準備しておく。 ・飲料水や簡易トイレを準備する。 ・連絡先や集合場所を家族で決めておく。 ・災害用伝言ダイヤル171を使えるようにしておく。など 〈地域〉 ・避難所のルールを守る。 ・避難所で災害時要援護者を助ける。 ・荷物を運んだり、食事の配給を手伝ったりする。 ・自分たちより小さな子どもたちの面倒をみる。 など 3 心のケア(VTR4)及び中学生がボランティアの人たちと一緒に活動した事例(VTR5)を視聴する。 ・災害時要援護者の避難も助けることができそう。 4 本時の活動を通して学んだことをふまえ、次の点について自分の考えをまとめる。 ・自分の家庭において「災害時の備え」として行うべきこと。 ・災害が発生した際、地域や社会の一員として実践したいこと。 5 教職員の話聞く。	○ワークシートに、地域と家庭、発災前と発災後に分けて考えさせ、グループで話し合わせる。自分を守るだけでなく、自分たちが助ける側にもなれることに気付かせる。 ○実際に中学生が行なった事例を紹介することで、話し合いで出なかったことなど視野を広げさせる。	なくなるライフライン」、VTR3「避難所の生活」 ・同上VTR4「心のケア」 ・同上VTR5「自分ができること」
--	--	---

5 評価

- (1) 災害時の備えを理解したか。
- (2) 学校や地域の防災や災害時のボランティア活動の大切さについて理解を深め、進んで参加しようとする態度を身につけたか。

6 その他

参考資料

- ・「災害から命を守るために～防災教育教材（中学生用）～」(文部科学省 H21.3)

中学校展開例9

地震を想定した避難訓練（緊急地震速報）

1 教科等名

特別活動 学校行事

【3 学校行事 （3）健康安全・体育的行事】

2 ね ら い

- (1) 地震のメカニズムや緊急地震速報システム等を理解させ、日頃から地震への備えをしておこうとする態度を育てる。(1年)
- (2) 地震によって起こる危険と安全な避難の仕方について理解させ、適切な行動がとれるようにする。(2年)
- (3) 地震発生時に、校舎内で起きる落下や破損を具体的に予測し、安全な対応を考えさせるとともに、日常における整理・点検励行の態度を育てる。(3年)
- (4) 地震発生時の適切な避難行動について訓練を通して理解させる。(1. 2. 3年)

- * 各学年毎の目標を取り入れた避難訓練を実施する。以下保健体育科「傷害の防止」応急手当の学習後に避難訓練を行う2年生の例。
- * 火災を想定した避難訓練では、安全な場所に速やかに避難することが求められるが、地震想定の場合には、学校施設の耐震化が図られていることもあり、安全な避難場所や避難経路を確認した上での行動が求められる。学年毎の避難訓練を実施するなどの工夫により、目標に合わせた具体的な行動訓練が可能である。
- * 各学年毎、総合的な学習の時間と組み合わせるなどして、地域防災や避難所開設時のボランティア活動等に発展させることも考えられる。

3 想 定

授業中に、緊急地震速報が発表され、その後、震度6弱の地震が発生。負傷者が発生し、応急手当が必要。安全を確保しながら、避難場所に移動する。

4 展 開

学習内容・活動	教職員の支援	資料等
1 本時の目標を確認する。 ①初期避難行動について理解する。 ②負傷者への応急手当と安全な場所への搬送の仕方について理解する。 2 活動内容を知る。 ①緊急地震速報発表直後の対応行動。 ②負傷者への応急手当。 ③負傷者を搬送しながら安全な場所への避難行動。 3 訓練活動を行う。 ①速報発表後、ものが「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」安全な場所を素早く判断し、安全を確保する。 ②揺れが収まった後、負傷者への応急手当を行う。 ③移動が困難な負傷者を搬送しながら安全な場所に移動する。 4 まとめ 活動を振り返り、本時の目標①②について理解できたか確認する。	○前年時の学習を想起させる。 ○保健体育の学習内容との関連を意識させる。 ○訓練ではあるが、実際に起こる事実としてとらえ、過去の被害や今後の地震動予測地図を示す。 ○危険を伴う行動であると同時に、中学生として災害時には家庭や地域でその責任を負うことを意識させる。 ○前年時の学習から、行動時の留意点について確認させる。 ○ペアで行う軽傷を想定したものや、グループでの重傷者への対応等を組み合わせる。 ○教室内で代用できる用具を使って取り組ませる。その際、安全に十分留意させる。 ※津波の襲来が予想される地域は、速やかに高台等への避難を行う。 ○学校内だけでなく、家庭や地域社会で自分ができることを再確認させ、地域防災への関心を高めさせる。	・災害時の写真や映像 ・国内地震発生分布や地震動予測地図

5 評 価

- (1) 緊急地震速報の発表後の初期避難行動について理解し、実践することができたか。
- (2) 保健体育科での学習内容と関連させ、応急手当や負傷者搬送の方法を理解し、安全に行うことができたか。

6 そ の 他

参考資料

- ・「地震動予測地図」

地震調査研究推進本部 <http://www.jishin.go.jp/main/index.html>

中学校展開 10

校内避難訓練（竜巻への対応）

1 教科等名

特別活動 学校行事

【3 学校行事 （3）健康安全・体育的行事】

2 ねらい

- （１）災害安全に関する意識を高め、防災訓練に対する積極的な態度を養う。
- （２）竜巻等突風によって起こる危険を的確に判断し、避難の仕方を理解させ、安全な行動をとれるようにする。

3 想定

竜巻注意情報が発表された後、積乱雲が見られ、竜巻が発生。学校方向に近づく兆しを察知したため、安全を確保しながら、対処行動をとる。

4 展開

学習内容・活動	教職員の支援	資料等
1 緊急校内放送を聞く。 ・竜巻が急接近しているという緊急放送を聞く。 2 避難準備をする。 ・帽子などをかぶる。 ・いすを移動する。 ・机を壁側によせ、シェルターを作る。 ・シェルターの下にもぐり、机の脚を両手でしっかりと持つ。 ・カバンなどで頭を覆う。	○校内放送をする。 『緊急放送。学校付近に竜巻が発生。窓の鍵をかけカーテンを閉めなさい。先生の指示に従って安全を確保しなさい。』 ○教室内教職員の指示（例） ・頭を覆うものを用意して、窓から離れ黒板の近くに集まりなさい。 ・机を移動してシェルターを作り、その下にもぐりなさい。  ○校庭等建物外の教職員の指示（例） ・近くの校舎に走って避難しなさい。 ・ガラスから離れて姿勢を低くしなさい。	※〈事前指導〉状況を想定しやすくするため、事前に竜巻の映像を視聴する。

3 校内放送を聞く。 ・竜巻が過ぎ去った放送を聞く。 ・状況を教職員に報告する。 (怪我の有無、周辺の状況) 4 まとめ ・講評：校長の話聞く。(校内放送) ・教室を復元し、訓練の反省を行う。	○理科室等特別教室内教職員の指示(例) ・飛散するものから離れて、机の下にもぐりなさい。 ・火を消し、薬品や実験器具に注意しなさい。 ○校内放送をする。 『竜巻は去って、状態は安定しました。先生方は児童生徒の状況を確認して、報告してください。』 ○担当教職員は、生徒の安否と怪我の有無、周辺の状況を確認、学年主任に報告する。 ※学年主任→教頭→校長 ○必要に応じて、緊急体制に入る。 ○外部機関・教育委員会へ報告する。 ○話を真剣に聞かせる。 ○本当に安全だったか、他の方法はないかなど、考えさせる。 ○避難の様子をVTR等で録画し、その様子を見ながら振り返らせる。 ○家庭や地域で、自分ができることを理解させ、地域防災への関心を高めさせる。	ワークシート VTR
--	--	-----------------------

5 評価

- (1) 災害安全に関する意識を高め、積極的な態度で防災避難訓練に参加できたか。
- (2) 竜巻等突風によって起こる危険を的確に判断し、避難の仕方を理解して、安全な行動ができたか。

6 その他

激しい突風をもたらす竜巻などの現象は、その発生が稀な上に、影響範囲が小規模で発現時間も短いため、一人ひとりがこれに遭遇する可能性は極めて小さい。一方、竜巻注意情報は比較的広い範囲(概ね一つの県)を対象に発表され、しかも必ずしも竜巻が発生するとは限らない。したがって、竜巻注意情報が発表された場合には、まず簡単にできる対応として、周囲の空の状況に注意を払うことや、気象庁ホームページの「竜巻発生確度ナウキャスト」等から詳細な情報の把握に努めることが必要である。そして、空が急に真っ暗になる、大粒の雨が降り出す、雷が起こるなど、積乱雲が近づく兆候が確認された場合には、頑丈な建物に避難するなどの身の安全を確保する行動をとることが重要である。本展開例は、このような身の安全を確保する行動の一例である。

なお、竜巻注意情報が発表されていない又は発表されたことを把握していない場合でも、積乱雲が近づく兆候を確認したときは、落雷、突風、急な大雨に備えて安全な建物に待避し、さらに竜巻を目視したときは本訓練と同様の対応

行動となる。竜巻の避難訓練は、移動距離が比較的短く、短時間で訓練を行うことができることから、様々な場面や時間帯で複数回訓練することが望ましい。

気象庁Webページ <http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/index.html>

- ・気象庁参考パンフレット「竜巻・雷・強い雨」
- ・気象庁参考パンフレット「竜巻から身を守る～竜巻注意情報～」
- ・気象庁参考パンフレット「急な大雨・雷・竜巻から身を守ろう！」

高等学校 防災教育年間計画 (例)

◆3学年の目標

- ・支援者としての役割を自覚し、防災活動や災害時のボランティア等支援活動に積極的に参加できるようにする。

◆主な指導内容

- ・自然環境と人類のかかわり、地震と地殻変動、大気の運動と気象、被災地のボランティア活動の実態（ア）ボランティア活動の体験（イ）現代に生きる人間の倫理、専門知識と防災知識を活用した地域貢献、生徒の創意を生かした自発的・自治的な活動（ウ）

1学期	2学期	3学期
◇自然環境と人類のかかわり（世界史B） ◇現代に生きる人間の倫理（公民科） ◇地震と地殻変動（地学） ◇「学校が避難所になったときにできること～習得した専門知識と防災知識を活用した地域貢献～」(工業) 【展開例⑤】	◇大気の運動と気象（地学） ◇地域の災害と復興を考える（総合的な学習の時間）【展開例⑥】 ◇「地域と連携した複合的避難訓練」（学校行事） 【展開例⑦】 ◇生徒の創意を生かした自発的・自治的な活動（ホームルーム活動）	◇ボランティア活動や社会奉仕の精神を養う体験をとおし、支援者としての視点をはぐくむ活動（学校行事）

◆2学年の目標

- ・災害時の危険を理解し、応急手当、心肺蘇生法の技能を身につけ様々な場面で活用できるようになる。

◆主な指導内容

- ・火山活動と地震、エネルギーとその利用、住生活の設計と創造、日本の自然環境、応急手当（ア）地域の災害の歴史調査、防災対策と地域住民の役割（イ）ボランティア活動の意義の理解と参画（ウ）

1学期	2学期	3学期
◇火山活動と地震（地学基礎） ◇エネルギーとその利用（物理基礎） ◇安全に配慮した住生活（家庭科） 【展開例④】	◇日本の自然環境（地学基礎） 【展開例②】 ◇応急手当の実践（心肺蘇生法を含む）（保健体育科）【展開例③】 ◇地域の災害の歴史を調査し、防災対策を知る（総合的な学習の時間） ◇地域と連携した複合的避難訓練（学校行事）【展開例⑦】	◇ボランティア活動や社会奉仕の精神を養う体験をとおし、支援者としての視点をはぐくむ活動（学校行事）

◆1学年の目標

- ・自然環境と防災のかかわりを知るとともに要援護者への配慮ができるようになる。

◆主な指導内容

- ・自然環境と防災、身近な自然景観と自然災害、食生活の設計と創造、地域の自然環境（ア）生活圏の地理的諸課題に関する調査（イ）子どもや高齢者とのかわわりと福祉（ウ）

1学期	2学期	3学期
◇身近な自然景観と自然災害(理科) ◇子どもや高齢者とのかわわりと福祉(家庭科)	◇自然環境と防災(地理A) 【展開例①】 ◇食生活の設計と創造(家庭科) ◇地域の自然環境を知る(総合的な学習の時間) ◇地域と連携した複合的避難訓練 (学校行事) 【展開例⑦】	◇生活圏の諸課題と地理的考察(地理A)

高等学校展開例 1

自然環境と防災

1 教科等名

地理歴史科（地理A）

【地理A 内容（2）生活圏の諸課題の地理的考察 イ 自然環境と防災】

2 ねらい

我が国の自然環境の特色と自然災害とのかかわりについて理解させるとともに、国内にみられる自然災害の事例を取り上げ、地域性を踏まえた対策が大切であることなどについて考察させる。

3 指導計画

（10時間 展開例3～5／10）

- （1）日本各地の自然環境の地域差を概観し、国内の自然災害の典型的な事例について学習する。（2時間）
- （2）身近な地域の自然災害を事例に、地域の新旧地形図の読図を通して、災害時の避難計画を立案する。（3時間）
- （3）作成した避難計画等を基に、学校独自のハザードマップを作成し、学校周辺地域における災害・減災対策案をまとめる。（5時間）

4 展 開

（3時間配当）

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 身近な地域の災害について知る。 ◇学校周辺ではどのような自然災害の危険があるか。	○①地震・津波災害②火山災害③豪雨や洪水等による水害④暴風や竜巻等による災害等、自分の地域ではどの被害に注意が必要か考えさせる。	・「災害から命を守るために～防災教育教材（高校生用～）」（文部科学省、H22.3）
2 地図から災害予測をする。 ◇身近な地域の新旧地形図を比較して変遷を読み取り、災害が発生しやすい場所を推測してみよう。	○以降グループごとに作業させる。 ○埋め立て等での宅地造成や、海拔等に注意し、危険箇所を着色させる。 ○治水堤防や砂防ダムなど災害を防ぐ工夫に気付かせる。	・地元地域の新旧地形図
3 災害時の避難経路を考える。 ◇ハザードマップと自分たちが予測した危険箇所から、安全な避難経路を作成し、発表しよう。	○危険箇所を把握し、災害時の安全な避難経路を想定させる。 ○危険箇所と判断した理由、迂回路設定の理由を具体的に考えさせる。	・自治体作成のハザードマップ

5 評 価

(中項目「自然環境と防災」として)

- (1) 学校周辺の地形の特徴を理解し、減災に関心をもつなど自然環境と防災に対する課題意識を高め、意欲的に追究することができたか。
- (2) 我が国の自然環境の特色と自然災害との関わりを基に多面的・多角的に考察するとともに、地域性を踏まえた対応の大切さを考察し、その過程や結果を適切に表現することができたか。
- (3) 地形図やハザードマップなど自然環境と防災に関わる諸資料の読図等により、有用な情報を選択し読み取ったり、図表などにまとめたりすることができたか。
- (4) 我が国の自然環境の特色と自然災害との関わりとともに、学校周辺で災害に遭ったときに、安全な避難経路を選べるようになるなど、地域性を踏まえた対応の大切さへの理解が深まったか。

6 そ の 他

参考資料

- ・「災害から命を守るために～防災教育教材(高校生用)～」(文部科学省、H22. 3)
- ・国土交通省ハザードマップポータルサイト
<http://disaportal.gsi.go.jp/>
- ・気象庁パンフレット「大雨や台風に備えて」(気象庁、H24. 5)
<http://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/index.html>

高等学校展開例2

日本の自然環境

1 教科等名

理科（地学基礎）

【地学基礎 内容（2）変動する地球 エ 地球の環境（イ）日本の自然環境】

2 ねらい

- （1）日本の自然環境の特徴を理解させ、その恩恵や災害など自然環境が人間生活とかかわっていることを考察させる。
- （2）地域を事例として自然災害の予測や防災について理解させる。

3 指導計画

（5時間 展開例4／5、5／5）

- （1）多様な自然景観、豊かな水、温泉、地下資源など自然の恩恵について（1時間）
- （2）気象災害（台風や豪雨など）、地震災害（地震動や津波など）、火山災害（降灰や火砕流など）等の自然災害について（2時間）
- （3）地域の自然災害の予測や防災（2時間）

4 展 開 （4／5）

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 地域の自然環境の特色をまとめる。 ①これまでの学習を基に地域の気象や地質・地形などを整理する。 ②国立・国定公園など自然景観や温泉等観光などに利用されている地域の特徴を探る。 2 地域の災害の歴史を調べる。 ①地域の災害史をまとめる ・自然災害の種類、発生した時期、被害の状況を整理する。 ・現在にも地域に残る災害の痕跡や記念碑等を探る。 ②被害が生じた原因を自然条件、社会条件の両面からとらえ、その後の対策などを整理する。 3 地域で今後生じる可能性のある災害を予測する。 ①過去の地形図を基に現在の市街地の変遷や地形改変等を理解する。	○地域の持つ特殊性と一般性を明確にする。 ○地学の知識が身近な地域の実情と結び付くことを認識させる。 ○自然環境や条件とのかかわりが深い産業なども紹介する。 ○地域で過去に特に大きな災害があった場合は、取り上げる。 ○日本の代表的な災害例も紹介する。 ○災害のイメージがつかみやすいように映像を活用する。 ○3以降はグループごとに話し合わせ、次時の演習を視野に入れた指導を行う。	・地形図、地質図等 ・理科年表 ・DVD等 ・市史等の文献 ・ビデオ、DVD、写真、新聞報道等 ・過去の地形図

②現在のハザードマップを確認し、地学的な知識から危険性を予測する。 ③災害の発生が地域や自分達に与える影響を考える。	○ハザードマップは完全ではないことに気付かせる。 ○グループごとのまとめ、発表を行う。	・行政等が発行したハザードマップ
--	---	-------------------------

展 開 (5 / 5)

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 グループ分けを行ない、DIGの準備をする。 2 グループごとにDIGを進める。 ①地域の自然条件（地質・地形等）を地図上で確認する。 ・市街地の分布 ・河川や湖沼などの水域 ・山地と平野との境界部 ・かつての地形（水域等） ②災害が生じやすい地域を想定する。 ・津波の被害が生じそうな地域 ・斜面災害が生じそうな地域 ・軟弱地盤等で被害が拡大しそうな地域 ・延焼火災の危険が予想される地域 ③町の構造を確認する。 ・鉄道、道路等 ・広場、公園、学校、防災施設等 ・狭隘道路、延焼火災の焼け止まり線 ④①～③の作業を踏まえ、地震等の災害が発生したときの対応や日常からの減災を話し合う。 3 グループごとに発表を行い、他のグループ、自分達の取組について相互評価や自己評価を行う。	○DIG^{*1}についての説明をし、地域において「対象とする災害は何か」を最初に考えさせる。 ○理科室の実験テーブル全体に広がる地図を用意し、その上にビニルシートを敷き、前授業で整理した知識をもとにシートの上書き込み、付箋を貼ったりさせる。 ○これまで学習した地学的な知識をもとに危険性を話し合わせる。 ○公共施設や交通路等が②の地域に含まれていないか考えさせる。 ○通学や生活範囲等でグループごとにフィールドワークを行う機会を持ち、確認することも重要であることを指示する。 ○お互いの気づきを大切にさせ、グループの成果を共有し合う。	・対象とする地域の地図、地形図、ハザードマップなど。 ・ビニルシート、油性ペン、付箋、セロテープ ・5万分の1地質図幅等 ・実体鏡、空中写真（航空写真） ・市街地図等

5 評 価

(1) 「地域の自然環境はどうなっているのか」、「災害の視点からみたとき、地

域にはどのような特徴があるのか」、「防災や減災に必要なものはどこにあるのか」等に興味関心をもつようになったか。

(2) 自然と地域を見直し、自分の住むまちの災害に関する危険性を理解できたか。

6 そ の 他

DIG^{*1}（ディグ）は、参加者が地図を使って防災対策を検討する訓練である。

【参考：静岡県地震防災センター <http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/>】

高等学校展開例3

応急手当の実践（心肺蘇生法を含む）

1 教科等名

保健体育科

【保健 内容（1）現代社会と健康 オ 応急手当】

2 ねらい

- （1）災害発生時に起こりうる事態を把握させ、一人一人が適切な応急手当の手順や方法を身につけることの必要性を理解させる。
- （2）実習を通して、連絡・通報や搬送の手順と心肺蘇生法のおこない方について学び、災害発生時等に必要に応じて実践できるよう実技を習得させる。
- （3）災害発生時において、的確に状況を把握し行動することの必要性を知り、協調性を持って行動できるようにする。

3 指導計画

（3時間 展開例2／3）

- （1）応急手当の重要性と手順・方法について（1時間）
- （2）心肺蘇生法のおこない方及び応急手当の方法について（1時間）
- （3）日常的な応急手当について（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 この授業の意義、展開を確認する。 2 災害時における心肺蘇生法が必要な状況について理解する。 3 心肺蘇生法の手順について学習する。 4 傷病者（打撲、出血、骨折、心肺停止状態の傷病者等）が出た場合を想定し、応急手当の手順・方法を身に付ける。 ①傷病者が出た場合の注意すべき事例を考える。 ②非常事態時においても迅速かつスムーズに動くための方法を考える。 →集団での対応方法や対応順序などについて話し合い、模造紙等を活用してまとめ作業をする。	○実技実習全体の流れをイメージさせる。 ○人形を活用し、必要な状況を理解させる。 ○実際に体験させ手順・方法を理解させる。 ○様々な条件を設定し、的確な応急手当の手順で心肺蘇生法をはじめとする応急手当を実践し、迅速かつスムーズに動ける行動力を身に付けさせる。	・教科書 ・心肺蘇生訓練人形 ・AED ・心肺蘇生訓練人形 ・担架（担架となりうる物） ・毛布（布など） ・ペン ・模造紙 ・紙（模造紙を含む） ・テープ

③災害時に起こりうる状況（打撲、出血、骨折、心肺停止状態の傷病者等）を設定し、応急手当の実習をする。 →②で考えた迅速かつスムーズな方法により実技実習を実践する。応急手当では、代用できるものを活用した応急手当を考えさせ実践する。	○実際の作業を通して学習内容の理解を深める。 ○傷病者の負傷状態をわかりやすく示し、対応させる。 （※起こりうる状況については、高校生が対応可能な内容とする。）	・応急手当に代用できる物（ストッキング、ラップ、傘、タオルなど）
--	---	---

5 評価

- （１）心肺蘇生法をはじめとする応急手当の必要性について理解できたか。
- （２）実習において、積極的に参加し、手順や方法を身に付けることができたか。
- （３）災害時に起こりうる対応可能な状況について、まわりと協力して行動する力を身に付けることができたか。

6 その他

参考資料 心肺蘇生法ガイドライン2010(数年ごとに見直されるため、最新の情報を参照する。)

<http://www.qqzaidan.jp/jrc2010.html>

高等学校展開例4

安全に配慮した住生活

1 教科等名

家庭科（家庭基礎）

【家庭基礎 内容（2）生活の自立及び消費と環境 ウ 住居と住環境】

2 ねらい

- （1）安全性や健康に配慮した住空間について、住宅の耐震化や家具の転倒・落下防止等、身の回りの安全性を高めることが重要であることを認識させる。
- （2）耐震・防火などに関わる基本的な知識と技術を理解させる。

3 指導計画

（2時間 展開例2／2）

- （1）地震発生時に想定される家の中の被害と防止策（1時間）
- ・DVD等の映像で室内の被災状況について理解する。
 - ・減災のための工夫や手段について考える。
- （家具の配置、室内の整理の仕方、転倒防止や固定のための器具や装置）
- （2）我が家の診断と被害防止策（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 自分の家の家具の配置等の状況について把握する。 ◇自分の家の寝室またはリビングなど、一部屋を選定して平面図を描いてみよう。 2 地震発生時の家の中の被災状況について前時の映像を思い出す。 ◇地震が発生した際に、家の中がどのような状況になっていたか、前時の映像を思い出してみよう。 ・家具の転倒 ・本や食器の落下 ・ガラスの飛散 3 自分の家について、防災の観点から被災状況を想定する。 ◇どのような被害が想定されるか、平面図（方眼紙①）に書き込んでみよう。	○ドアや窓、家具の配置を平面上に記入させる。 ○前時に映像等で確認した被災状況について思い出しながら作業ができるよう助言する。 ○記入例を提示し、被害想定が行えるように助言する。	・方眼紙① ・平面図記入例

4 自分の家の、減災対策について考える。 ◇被害を減らすための家具の配置や固定、収納方法について考え、方眼紙②に新たな配置図を描き、留意すべき減災のポイントを書き込んでみよう。 ・重いものは上に乗せない。 ・出入口近くに家具を置かない。 ・寝場所に倒れないよう家具の配置に配慮する。 ・家具や扉を転倒防止金具やバンドで固定する。 ・ガラス飛散防止フィルムを活用する。 ・非常時に役立つ物品の収納場所を工夫する。 5 自分の家をより安全な住環境とするための工夫についてまとめる。 ◇グループ内でメンバーの減災対策について話し合ってみよう	○減災のためのポイントを確認させる。 ○グループでそれぞれの対策について発表させ、相互評価させる。	・方眼紙②
--	---	--------------

5 評価

自宅ですぐにできる減災対策や、将来自分で住居を選択したり購入したりする際の基本的な内容を理解したか。

6 その他

参考資料

防災科学技術研究所ホームページ（E-デフェンスを用いた耐震実験などの動画を配信）
<http://www.bosai.go.jp/index.html>

高等学校展開例5

学校が避難所となった時にできること

1 教科等名

工業科（課題研究）

【課題研究 2 内容 (1) 作品製作】

2 ねらい

工業の基礎的・基本的な学習の上に立って、工業に関する課題を生徒自らが設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決に向けて意欲的に取り組む能力や自発的、創造的な学習態度を育てる。また、これまでに各科目で習得した知識や技術を活用し、さらに新しい知識や技術を学びながら作品を完成させる。

3 指導計画

(24時間 展開例4～9 / 24)

- | | |
|---|-------|
| (1) 地域防災と避難場所について | (1時間) |
| (2) 学校が避難所となった場合の共助について
(防災設備「かまどベンチ」の活用についても触れる。) | (1時間) |
| (3) 設置・製作及び全体計画作成 | (1時間) |
| (4) 設計（形状、構造、設置数の決定、図面製作） | (6時間) |
| (5) 製作準備活動（材料の準備、使用器具の準備、運搬） | (3時間) |
| (6) 製作活動 ・基礎型枠、基礎コンクリートづくり | (3時間) |
| ・レンガ積み | (3時間) |
| ・鉄網製作と座板製作 | (3時間) |
| ・仕上げ作業（型はずし、整地等） | (3時間) |

※地域社会の理解と貢献の意識を深めるため、連携・交流を通じた実践的な展開を図る。

※計画～製作、使用時において、地域住民との交流や協働の機会の設定を工夫する。

※文化祭や避難訓練で実際に活用するなどして発表する。

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 かまどベンチの形状について考える。(1時間) ◇ICTを活用してかまどベンチの形状について調べてみよう。 ◇調べたことから、非常時における困難な状況を具体的にイメージして、形状のスケッチを完成させよう。	○グループで話し合った意見をワークシートにまとめ、発表させる。 ○非常時にかまどベンチが、地域住民の食に関する生活を守ることを認識させる。 ○安全な形状であるか確認する。	・「かまどベンチづくり」活動の手引き ・かまどベンチ写真 ・ワークシート
2 かまどベンチの構造について考える。(1時間) ◇使用する燃料、調理器具や製作材料等から構造を考える。 ◇非常時に火を取り扱うには、どのような構造が安全であり、安定した火力がえられるか考えよう。	○グループで話し合った意見をワークシートにまとめ、発表させる。 ○安全な構造であるか確認する。 ○通風口があるか確認する。	・ワークシート
3 かまどベンチの設置数の決定(1時間) ◇前回の授業で、校内のどの場所に設置しておく効果的か考えた。 実際に避難してくる人数を想定して、設置数を考えよう。	○グループで話し合った意見をワークシートにまとめ、発表させる。 ○学校の地形、避難者の動線を具体的にシミュレーションさせる。	・ワークシート ・地形図等 ・校内マップ
4 かまどベンチの図面製作(3時間) ◇1から3までの学習活動を踏まえ、CADを活用して、図面を製作しよう。	○安全や環境に配慮し、ものづくりを合理的に計画された製作物であるか確認する。	

5 評 価

- (1) 地域防災における学校及び地域公共施設の役割や災害時における困難な状況を具体的にイメージして形状・構造を考えているか。
- (2) 安全・安心に活用できるかまどベンチであるかを適切に判断して設計し、図面が製作されているか。

6 そ の 他

参考資料 かまどベンチの写真

(左) かまどとして使用時



(右) 通常は座板を被せ、ベンチとして使用できる。



高等学校展開例6

地域の災害と復興を考える

1 教科等名

総合的な学習の時間

2 ねらい

- (1) 災害についての正しい知識と地域の防災の在り方について理解を深め、災害発生時、発生後に必要な知識・技能を身に付けさせる。
- (2) 高校生ができる支援活動等を考え、地域の一員としての責任を自覚させる。

3 指導計画

(14時間 展開例10 / 14)

- (1) 災害の種類について調べる (2時間)
- (2) 地域で発生した災害を調べる (3時間)
(班で聞き取り調査やアンケート調査を行う)
- (3) 地域の防災について調べる (5時間)
(災害の未然防止、個人の防災対策、地域の防災計画、負傷者の救助方法、ボランティア活動、災害からの復興等を班で調べる)
- (4) 地域防災訓練に参加する (4時間)

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 災害復興時にできる高校生のボランティア活動について考える ◇被災地では、どんな援助を必要としているのか考えてみよう。 2 被災地で必要な援助を把握する方法を知る。 ◇東日本大震災の支援に関して、課題となったことは何だろうか。 ◇被災地が本当に必要としている物資は何だろう。物なのか、人手なのか、どのように調べればよいのだろうか。 3 自分たちにできる援助を考えてみる。 ◇被災者のニーズを把握したところで、自分たちにできる支援にはどんなものがあるだろうか。	○グループごとに考えさせる。 ○短冊に記入させ、黒板等に貼り付けさせる。 ○支援が被災者のニーズに合わない例、義援金の活用の遅れなどがあること等を示唆する。 ○文化祭などの学校行事や、授業、部活動等個人や集団があらゆる活動の場でできることを考えさせる。	・「災害から命を守るために～防災教育教材(高校生用)～」(文部科学省 H22. 3) ①総論「災害から命を守る」、⑥「地域社会で支え合う」 ・インターネットによる被災地情報掲示板など

4 グループごとに発表する。	○各グループの意見を尊重しつつ、 実現の可能性について他のグループにも検討させる。	
----------------	--	--

5 評価

- (1) 復興活動を支援できる方法について学ぶことができたか。
- (2) 高校生として社会に貢献する意識を高めることができたか。

6 その他

参考資料

「災害から命を守るために～防災教育教材（高校生用）～」(文部科学省、H22. 3)

高等学校展開例7

地域と連携した複合的避難訓練

1 教科等名

特別活動 学校行事

【学校行事 内容（3）健康安全・体育的行事】

2 ねらい

- （1）緊急地震速報が発表された場合や地震や火災が発生した場合に、自分の安全を確保する適切な避難行動がとれるようにする。
- （2）科目「保健」で学んだ傷害の防止や応急手当の知識を活用させる。
- （3）災害時の自助・共助の基本的行動について確認を行ない、高校生としてのリーダーシップや支援活動など、自分たちにできることを考えさせ、防災意識の向上を図る。

3 指導計画

（3時間 展開例2／3）

- （1）緊急地震速報について・地震、火災発生時の安全行動について（1時間）
- （2）避難行動訓練・災害体験（1時間）
- （3）避難行動の振り返りと学校が避難所となった場合の状況について（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 緊急地震速報への対応行動をとる。 ・授業中（校舎内・グラウンド等それぞれで活動）に緊急地震速報が入った。 ◇直ちに安全体勢をとりなさい。 ・出入り口を開け、避難路を確保する。 ・カーテンを閉め、窓ガラスの飛散に備える。 ・「落ちてこない」「倒れてこない」を念頭に、速やかに安全体勢をとる。	○校内放送で速報が発表されたことを周知する。 ○落ち着いて揺れに備えるよう指示する。	・緊急地震速報音声
2 地震発生時の対応行動をとる。 ・まもなく震度6弱の揺れが到達した。 ・揺れは収まったが、3階実験室から出火。		
3 火災発生時の避難を行う。 ・校舎内にいる生徒は指示に従い避難する。 ・避難経路または誘導に従い、迅速な判断と避難行動をとる。 ・避難後の確認点呼を速やかに行う。	○避難を指示、誘導する。 ○確認点呼を迅速に行わせる。	・生徒名票または出席簿（点呼等安否確認用）

4 各学年で体験学習を行う。 1年 起震車・煙体験ハウス・消火体験 2年 応急手当と心肺蘇生法訓練 3年 避難所開設等の支援 ・テント設営 ・避難所受付、誘導体験 ・物資運搬、配布体験	○それぞれの体験を安全に行わせる。 ○学校が避難所となった場合のレイアウトを提示する。 ○避難者役とボランティア役に分けて行わせる。	・起震車等（消防署と協力） ・AED等（消防署や医療機関等と協力） ・避難所開設マニュアル ・テント等（市区町村等と協力）
--	---	--

5 評価

- （１）どんな場所にいても、災害発生時に自分の身を守る安全行動がとれたか。
- （２）災害時に自分にできることを考え、社会貢献意識をもつことができたか。

6 その他

各関係機関だけでなく、近隣自治会の役員や住民、自治体担当者にも参加してもらい、より実践的な訓練とすると同時に、関係者同士の協力体制を確認する機会とする。

障害のある児童生徒等については、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に準じた教育を行うとともに、障害があることによる学習上または生活上の困難を改善・克服し自立を図るための教育が行われている。個々の児童生徒等の実態把握を踏まえ、個別の指導計画を作成してきめ細かな指導を行うことが求められている。

防災教育を進めるに当たっては、個々の障害の状態や発達の段階等に応じて、災害時に安全に避難することやその後の生活に関する指導だけでなく、必要に応じて周囲の人に支援を求めることができるようにすることが重要である。さらに、障害者の視点から防災に関するニーズを地域社会に発信するなどの学習活動も考えられる。また、児童生徒等にとって安全な環境を整えることも重要である。

以下は、防災教育の年間計画の一例（特別支援学校（知的障害）の例）を示しており、次頁以降には12の授業展開例を示しているが、各学校においては個々の児童生徒等の障害の種類や程度、学校の環境等に応じた指導を展開することが求められる。

特別支援学校（知的障害） 防災教育計画（例）

特別支援学校（知的障害）の防災教育で身に付けさせたい力

一人一人の命の大切さを知り、健康で明るい学校生活を送ることができる児童生徒等になる。

ア 知識、思考・判断

- ・命を守るための身体の部位を理解するとともに衣服の調節等の体調管理ができる。
- ・火災、地震、津波、液状化、風水害等の災害について理解する。

イ 危険予測・主体的な行動

- ・命を守るための健康な身体づくりの方法を理解し主体的に取り組む。
- ・災害時の指示（言葉、カード等）を理解し行動に移すことができる。

ウ 社会貢献、支援者の基盤

- ・名前を覚え挨拶から始まるコミュニケーションを図ることができる。
- ・災害時に報告や相談等のコミュニケーションを図ることができる。

◆高等部の目標

- ・自分の気持ちを伝え、災害時にもコミュニケーションを図ることができるようになる。

1学期	2学期	3学期
◇「災害時の『ほうれんそう』～緊急時のコミュニケーション～」(自立活動) 【展開例⑨】 ◇訓練の事前事後学習(学級活動) ◇防災リュックや節電対策製品の作成、被災地に届ける寄せ植え作り(作業学習)	◇「全校児童生徒集会～防災をテーマとした地域との交流～」(学校行事) 【展開例⑩】 ◇防災マルチパーティションの作成(美術) 【展開例⑧】 ◇防災クイズの作成(情報) ◇「地域連携した総合防災訓練」(学校行事) 【展開例⑪】	◇防災劇(総合的な学習の時間) ◇防災安全マップの作成(情報) ◇保存食を活用した調理実習(家庭) ◇災害後の衛生(保健) ◇地震に強い家にしよう(参観授業)(生活単元学習) 【展開例⑦】

◆中学部の目標

- ・言葉やサインを見聞きして行動できるようになる。
- ・安全に注意した生活を送り、集団生活のルールを理解できるようになる。

1 学期	2 学期	3 学期
◇訓練の事前事後学習（学級活動） ◇言葉やサインの理解（国語）（自立活動） ◇友だちと協力して身体を動かす（体育） ◇約束や決まりを守る（学級活動）	◇防災キャンドル作り（生活単元学習） ◇「全校児童生徒集会～防災をテーマとした地域との交流～」（学校行事）【展開例⑩】 ◇災害に備えよう～自分の身を守るためにできることは～（非常持ち出し袋の中身の買い物、消防署の見学等）（生活単元学習） ◇「地域連携した総合防災訓練」（学校行事）【展開例⑪】	◇ぼうさいダンス（音楽） ◇保存食を活用した調理実習（家庭）

◆小学部の目標

- ・遊びや音楽の中で十分に身体を動かすことができるようになる。
- ・帽子や靴の着脱ができるだけ早くできるようになる。

1 学期	2 学期	3 学期
◇訓練の事前事後学習（特別活動） ◇帽子や靴の着脱（日常生活の指導） ◇コミュニケーションボードの読み取り（国語） ◇十分に身体を動かす（体育）	◇固形燃料作り（生活単元学習） ◇「全校児童生徒集会～防災をテーマとした地域との交流～」（学校行事）【展開例⑩】 ◇「地域連携した総合防災訓練」（学校行事）【展開例⑪】	◇ぼうさいダンス（音楽） ◇ルールや集団を意識して身体を動かす（体育）

障害のある児童生徒等の災害時に予想される困難と支援例

障害のある児童生徒等は、自分の身を守り、安全な場所に避難するなどの行動をとる際、様々な困難が予想される。学校においては、一人一人の予想される困難を理解し、必要な支援体制と対応計画を検討しておく必要がある。

ここでは、障害ごとの避難行動時等に予想される困難と支援を例示的にまとめたので、避難訓練等の計画を検討する際の参考とされたい。

〔障害ごとの避難行動時等に予想される困難例と支援例〕

障害種	特 徴	避難行動時等に予想される困難例	支 援 例
視覚障害	・視覚による、異変・危険の察知が不可能な場合や瞬時に察知することが困難な場合が多く、単独では、素早い避難行動がとれないことがある。	・落下物に対する対応ができにくい。 ・日常と異なる床や路面等の状況把握ができず、安全な避難経路の選択ができにくい。 ・視力や視野等の状況が一人一人異なるので、個別の対応がないと移動しにくい。 ・火災は遠くから見て把握することが困難である。煙の匂いや炎の熱等を感じてから避難するのでは遅くなってしまうことが予想される。 など	・地震時に室内の落下する可能性があるものを日ごろから確認しておく。身を隠す場所を室内に確保しておく。 ・防災頭巾やヘルメット等を身近に備えておく。 ・安全な経路を確認するための介助が必要となる。弱視者の場合も非常時は移動援助が必要な場合が多い。 ・火災時は、避難経路を、誘導装置等を用いて音声で知らせると安心感が増す。(移動援助は必要である。) ・できる限り早く放送などで出火場所等の状況を知らせる。移動援助の際も、情報を言葉で伝えると予測して安心して行動できる。 など
聴覚障害	・音声のみでは避難・誘導の指示が認識できない場合がある。補聴器を使用しても困難な場合が多い。大きな声で話をする等のほか、手話、筆談など視覚的なコミュニケーション手段を用いるとよい。	・何が起きているのか、どこに避難したらよいのか、どこが危険な場所なのか等について、音声のみの情報ではわかりにくい。 ・自分の伝えたいことを理解してもらえない場合が多い。 など	・点滅フラッシュ、ディスプレイ等を使用するなど、文字や地図等の視覚情報を用いて、どんな災害がいつ、どこで起こったのか、またどのように行動したらよいか等が察知できるようにする。 ・日ごろから、災害時にはどうすればよいかをよく話し合っておく。 ・筆談ができるような筆記用具を携帯したり、避難場所等に設置したりする。 など

知的 障害	・異変や危険の認識が不十分な場合や災害による精神的な動揺が激しくなる場合がある。	・何が起きたのか理解しにくく、自分で判断して行動することができにくい。 ・自閉症など、障害によっては、予定が変わってしまったことで、見通しがもてなくなり、パニックに陥ったり、集団で行動できなくなったりする場合がある。 ・音に敏感だったり、持ち物へこだわったりして、元いた場所に戻ってしまったり、動けなくなったりするケースもある。 など	・日ごろから一人一人の児童生徒等の状況を十分に把握し、環境の変化に対応できる人間関係を確立する。 ・避難後の行動など、次の見通しを早い段階で伝えることができるような配慮をする。 ・重度の障害のある児童生徒等の場合、一人一人に対応する。 ・日ごろの避難訓練の積み重ねが、スムーズな避難につながる。 など
肢体 不自由	・体幹や下肢が不自由な場合、自力歩行や素早い避難行動が困難なことが多い。 ・障害が重度の場合、自力での移動が困難なことが多い。	・車椅子や歩行を補助する杖などを使って移動する際、床面や道路の状況等で移動が困難になる場合があり、さらに介助者がいない場合は、身動きができない状態になる。 ・医療的ケアに使う機器が故障したり停電したりした場合、ケアを行うことができなくなる。 ・障害が重度の場合、大きな音や振動に「びっくり反射」と呼ばれる姿勢反射が現れ、座位や立位を保てずに倒れてしまうことがある。 など	・児童生徒等一人一人の状態に応じて、災害時の移動や避難の方法を検討し、車いす、担架、リヤカー等の移動用具と移動援助者が確保できるようにしておく。 ・非常時の校内の電源確保について対策を講ずるとともに、災害時に保護者に引き渡すまでの間に必要となる医療的ケアの器具や対応方法、実施体制等を保護者や医療機関と確認し、災害時の対応マニュアルとして作成する。 ・突発的な動きや衝撃から頭部や手足を保護するクッション、カーペット、マットなど、日ごろから安全な環境づくりに努める。 など
病弱・ 身体虚弱	・自力で歩行できなかったり、素早い避難行動が困難だったりする。常時使用する医療機器や薬、ケア用品を携帯する必要がある。	・入院中の児童生徒等については、病院との連携により対応できるが、通学している児童生徒等については、服薬している薬の確保や生活規制がある場合の対応に困難が生ずることが想定される。 など	・災害時に保護者に引き渡すまでの間に必要となる対応方法等について保護者や医療機関と確認し、災害時の対応マニュアルとして作成する。 など

発達 障害	ADHD：指示を最後まで聞き取ることが苦手である。また、衝動的に行動してしまうことがある。 広汎性発達障害：状況の理解が難しく、急な行動の切り替えが苦手である。他者にとってはささいな事でも、パニックを起こす場合がある。コミュニケーション能力に障害がある。 LD：掲示物などの文章を読めない場合がある。	・災害が発生した場合、状況や指示の理解が難しく、適切な行動を選択することができない場合がある。 ・パニックを起こす場合もある。など	・障害の状態に応じて、児童生徒等に近づいて指示を出したり、常に大人が手を取って共に避難したりするなどの配慮や、衝動的行動の要因となるような、刺激（けむりや火災、サイレン等）から遠ざけ、あるいは排除する等の配慮をする。 ・口頭による指示に従えないときは、メモなどにして文字によって掲示することが効果的な場合もある。 ・災害時には、避難した後の安全確保と同時に、その後の見通しを具体的にもたせる。 ・避難後、掲示物や印刷物によって通知する場合、読むことができていないこともあるので、口頭で伝え、確認する。など
------------------	---	--	---

※ 児童生徒等の中には、複数の障害をもっている場合もあり、対応には十分配慮が必要である。

特別支援学校展開例 1（視覚障害）

安全に一人通学しよう～災害（地震災害）時も安全に避難帰宅しよう

- 1 教科等名** 自立活動（中学部）
【自立活動 内容（4）環境の把握】

- 2 ねらい**
- （1）一人で登下校の途中に突然襲ってくる大地震の被害と、視覚に障害があることによる状況把握と移動の困難さを理解させる。
 - （2）登下校の途中に地震が起こった時に、どうすればよいかを知り対応できるようにする。

- 3 指導計画**（4時間展開例 1 / 4）
- （1）地震災害の様子を知り、発災した時の対処法を確認する。（1時間）
視覚障害者が災害時にどんな対応をしたらよいか、またどのような備えをしたらよいか考えさせる。また、適切な援助依頼の方法を身に付けさせる。
 - （2）大地震等の災害時に家族や学校と連絡ができるようにする。（1時間）
確実な連絡先を確認し、連絡方法を身に付けさせる。
 - （3）登下校中に大地震が起こった時の対処法を身に付けさせる。（2時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 地震災害について知る。 ◇大地震の被害について知っていることをまとめよう。 ◇交通機関はどのようになるだろうか。 ◇周囲の人々の様子はどのようになるだろうか。 2 通学途中に大地震が発生した時の対処法を知る。 ◇視覚障害者が大地震にあったとき、どうすれば安全を確保できるか考えよう。	○大地震の写真やビデオ・DVDなどの資料をもとに過去の大震災被害を知らせる。体験した人の話から交通機関や人々の様子を考えさせる。（周囲の状況把握が困難、通常経路での移動が困難、援助依頼が通常より困難など） ○通学途中に可能な安全確保方法を考えさせる。 ○準備しておくの良いものを考えさせる。 ・携帯電話を身に付けておく。弱視生も白杖を携帯する。	・「災害から命を守るために～防災教育教材（中学生用）～」(文部科学省、H21.3) ・写真など ・体験談（拡大又は点字など留意）

3 次回の学習内容を知る。	○家庭や学校と連絡をとり家族や教職員と合流する方法をあらかじめ考え決めておく必要があることを確認する。 ○通学経路上の避難場所の存在を知り地図上での場所を知らせる。 ○「指導計画（3）」において実際の通学路に確かめに行き場所を確認する。 ○安全な場所まで誘導してもらうための援助依頼の練習をする。 ○家族との連絡方法や合流場所について家庭で話し合ってくるようにさせる。 ・家族に協力を依頼し、連絡の練習をする機会を設定する。	・通学かばん ・白杖 ・経路図（拡大図又は触図）
----------------------	---	--

5 評価

- （1）過去に起こった大地震災害における交通機関の様子がわかり、視覚障害者に予想される困難や、その対処法を理解できたか。
- （2）登下校中に大地震が起こった際の援助依頼の方法を身に付けることができたか。

6 その他

指導のポイント等

- ・白杖歩行や通学経路の確認などを学習した生徒に上記内容の指導を行う。この段階では通常の状態での学校や家庭への連絡手段は学習済みである。
- ・交通機関使用中（電車・バス等）に火災がおきた場合の対処法も上記の流れで指導する。特に避難場所や経路等が地震時と異なる場合は、実際に現場に行き確認することが必要である。通常学級の中学生より通学距離が長く時間がかかる場合があるので、何回かに分けたり実際の下校途中に確認や練習することも想定する。

特別支援学校展開例2（視覚障害・知的障害）

地震を想定した避難訓練

1 教科等名

特別活動 学校行事

【(小学部) 特別活動 4 学校行事 (3) 健康安全・体育的行事】他

2 ねらい

視覚障害

(1) 放送や教職員の指示を聞き安全に行動できるようにする。

(2) グラウンドへ安全に避難させる。

知的障害

(1) 放送や教職員の指示を聞き安全に行動できるようにする。

(2) グラウンドへ安全に避難させる。

3 指導計画

年間避難訓練実施計画に沿い、年3回合同訓練を行う。今回は3回のうちの1回目。

(1) 事前指導 地震が起きた場合の避難経路について学習する。(学級指導)

(2) 本時の学習 教職員の指示と放送に従い避難する。(1時間)

(3) 事後学習 今回の訓練について(学級指導) (4時間展開例1／4)

4 本時の活動

○視覚障害幼児・児童・生徒

地震発生後、グラウンドへ避難。点呼後、各教室に戻り、事後指導。

・1階児童生徒等は、各教室南側出入口よりグラウンドへ。

・2階、3階児童生徒等は、各階段を使って1階へ行き、非常口からグラウンドへ。

○知的障害児童・生徒

地震発生後、グラウンドへ避難。点呼後、各教室へ戻り、事後指導。

・1階児童生徒は、各教室南側出入口よりグラウンドへ。

・2階、3階児童生徒は、各教室最寄りの登下校時の階段を使用し、西側非常口ドアを使ってグラウンドへ。

○誘導等の配置：階段移動等を安全に行うために担任以外の教職員も応援に入る。

・視覚障害部門避難補助：幼稚部、小学部、中学部に寄宿舍職員が入る。(各部1名計3名)

・視覚障害部門巡視及び誘導：1階2階誘導・巡視は、事務職員(各階各1名)

3階誘導・巡視は、理解推進職員（1名）

・知的障害部門巡視及び誘導：1階2階誘導・巡視は、事務職員（各階各1名）

3階誘導・巡視は、理解推進職員（1名）

○安否確認：理解推進職員、講師、寄宿舍指導員

5 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 地震発生を知る。 ・（放送） 「訓練地震、訓練地震。ただいまかなり大きな地震が発生しました。幼児、児童、生徒は速やかに机の下など安全な所に避難しなさい。」 2 机の下にもぐるなど安全を確保する。 3 グラウンドへ避難する。 （地震発生放送約1分後） 「余震や火災のおそれがあるので、幼児、児童、生徒はグラウンドに避難しなさい。」（2回繰り返す） 4 グラウンドへ集合・整列する。 5 校長の講評を聞く。	○児童生徒等に机の下など安全な場所に避難するよう指示する。 ○頭部を自分で保護できない児童生徒等は、教職員が介助する ○防災ずきん、ヘルメット等をかぶらせ、避難させる。 ○誘導、巡視担当は、各校内を点検する。 ○各担任は、児童生徒等の安否を確認し各部門副校長に報告する。 ○点呼「○学部△年□組、（幼児、児童、生徒）○名中○名欠席、○名避難完了（○○が不明です）。教職員は、A,B,C無事です（Aが不明（出張、年休）です）。」 学部主任は、担任外教員、講師等の安否を副校長へ報告する。経営企画室、厨房、寄宿舍職員の安否を副校長へ報告する。 ○両部門副校長が校長に点呼報告を行い、全員点呼を完了する。 ○管理職不在の場合は、視副校長＞知副校長＞生活指導主任の順で全体集約。	・ヘルメット・防災ずきん ・本部旗 ・メガホン

6 評 価

- （1）地震を想定し、場面に応じたやり方で身体の安全を確保することができたか。
- （2）（視覚障害部門）周囲の状況を理解し、安全に注意しながら速やかに集合場所へ避難することができたか。
（知的障害部門）周囲の状況を把握し、落ち着いて安全に注意しながら速やかに集合場所へ避難することができたか。

7 そ の 他

- （1）雨天の場合は下記のように実施する。
視覚障害部門：視覚部門棟玄関に集合点呼後、解散。
知的障害部門：知的部門棟2階ホールに集合点呼後、解散。
- （2）今回の放送は視覚障害部門副校長が行う。また、非常ベルは使用しない。

特別支援学校展開例3（視覚障害）

地震を想定した避難訓練

1 活動名 寄宿舎避難訓練

- 2 ねらい
- （1）地震に際しての身の守り方、避難の仕方を身に付けさせる。
 - （2）指導者の指示に従って、安全に避難させる。

- 3 指導計画
- （1）事前指導 防災オリエンテーション：全員を対象に避難訓練のねらい、諸注意を説明する。（急に動き出さずに、静かに行動すること。放送又は口頭での指示をしっかりと聞き、次の行動に移ること等。）
 - （2）避難訓練 想定：夕食後（18：55～19：05頃）に地震発生、夜間の避難。居室から玄関への避難とする。
 - （3）事後指導 訓練終了後引き続き行う。

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
1 放送①：担当係 ・緊急地震速報の音。 ・音のあと放送。 「避難訓練。大きな地震が発生しました。身の安全を守り、先生の指示に従いなさい。」 2 放送②：担当係 「避難訓練。地震が収まりました。大きな余震が来るかもしれないので、舎生は玄関前に集合しなさい。」 3 避難 4 点呼：担当係	○地震発生の放送を聞くように促す。 ○緊急地震速報発表と同時に教職員ならびに舎生は防災ずきんをかぶらせ、窓とドアを開け、机の下にもぐらせる、部屋中央で布団をかぶらせるなどして身体の安全確保を図る。 ○避難の放送を聞かせ、避難開始。 ○靴を履き、防災ずきんをかぶる等させて玄関に避難集合させる。 ○教職員は舎生を静かにさせながら安全に誘導する。 ○点呼は誘導職員の報告により行う。 ○舎生名簿で確認。逃げ遅れ等の児童生徒等がいた場合、教職員に指示をし、搜索誘導する。 ○避難開始から全員の避難が終わった時点まで時間計測する。	・調理・用務の方に連絡。舎監へは、事前に泊まり当番と打ち合わせておく。 ・防災ずきんは居室の他、娯楽スペースなどにも常備しておき、即時装着できるようにしておく。 ・ストップウォッチ、非常持ち出し袋、舎生名簿

5 事後指導	○今回の避難に要した時間、他の舎生の様子を聞かせる。講評、注意点を発表する。	
--------	--	--

5 評価

- (1) 地震に際して場面に応じたやり方で身を守ることができたか。
 (2) 指導者の指示に従って、安全に避難することができたか。

6 その他

- (1) 防災用品は月1回安全点検日に点検確認、年1回薬品等交換する。

①寄宿舎生名簿②舎生住所③防災用カード（寄宿舎保管用）④常備薬（丸1日分）④
 応急用医薬品⑤非常用ラジオ（懐中電灯付）⑥笛・軍手・タオル・石鹼・ロウソク・マッ
 チ・懐中電灯・おぶい紐⑦携帯電話・テレカ⑧小銭⑨学校機戒警備用カード⑩児童生
 徒等緊急対応マニュアルプリント

- (2) 指導のポイント等

宿泊舎生はサイレンや揺れに対し敏感で、過剰反応してしまうケースがある。実際に近隣からサイレン等の大きな音や声が複数聞こえることも想定される。誘導介助者が状況を説明してサイレン等の音の意味を十分理解できるようにするとともに、日ごろから信頼関係に基づいて、普段と違う状況の中でも急に動き出さずに落ち着いて対応できるよう、また、訓練の中でも多様なケースを想定して指導する必要がある。

特別支援学校展開例4（聴覚障害）

大地震に備えて

1 教科等名

特別活動 学級活動（小学部高学年）

【特別活動1学級活動（2）日常の生活や学習への適応及び健康安全
 カ心身ともに健康で安全な生活態度の形成】

2 ねらい

- （1）突然発生する大地震に対し、万一に備えることの必要性について意識を持たせる。
- （2）大地震が起こった時に、どうすればよいかを知り、対応策を考えることができるようにする。

3 指導計画

（3時間 展開例2／3）

- （1）地震災害について調べる。（1時間）

聴覚障害者が災害時にどんな苦労があったのかを調べ、どのようにしたらよいか、またどのような備えをしたらよいか話し合う。

- （2）登下校中に大地震が起こった時に、どうすればよいか考え話し合う。

大地震に備えて、準備することや連絡方法など家族でどのような話し合いをすればよいか考える。（1時間）

- （3）家族で話し合ってきたことについて発表する。（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
1 地震災害について学習したことを思い出す。	○前時に学習した内容を振り返り、災害時にはどのような困難や苦労があるのか具体的に思い出させる。	・調べ学習で使用した資料、写真等
2 大地震が発生したときにどうすればよいか話し合う。 ◇大地震が起こったとき、どうしたらよいか考えよう。 ・学校にいる時 →教師の指示に従って避難する。あわてないで落ち着いて行動する。	○学校にいる時、登下校時など具体的な場面を想定させる。 ○あらかじめ日ごろから準備しておくの良いものを具体的に考えるよう促す。（メモ、筆記用具など） ○災害時、携帯メールはつながりにくいことを確認する。また、災害時の伝言板があることを知らせる。	

・登下校の時 →駅員や周りの大人に様子を 確認する。あわてないで行 動する。情報が伝わりにく いときは筆談やメールなど 文字情報を活用する。 3 大地震に備えて、何を準備した らよいか、家族との連絡方法はどう したらよいか等について話し合 う。 ◇家族が離れ離れになっていると き、どうしたらよいか家族で 話し合おう。	○劇化するなどして、場面がイメージしやすい ようにする。 ○在校中に大地震が発生したときに家族は何を しているか考えさせる。 ○地域の避難場所の存在やその場所について調 べるとよいことをおさえる。 ○家族との連絡方法や備えについて話し合っ てくるようにさせる。(後日発表する。) ○災害時、家族それぞれがどのような行動をと るのか、状況に応じて想定し、それらをお互 いに知り合っておくことが大切であることを 確認する。	・ワークシート（家族で の話し合いの例） ・非常持ち出し物品の例 ・近隣の避難マップ等
--	--	--

5 評価

- (1) 過去に起こった大地震災害の様子を調べ、どのような困難がおこるのか理解できたか。
- (2) 登下校中に大地震が起こったとき、どうすればよいか具体的に考えることができたか。
- (3) 大地震に備えて、対応策を考える必要があることを理解できたか。

特別支援学校展開例5（聴覚障害・肢体不自由）

地震及び火災を想定した合同避難訓練

1 教科等名 特別活動 学校行事（高等学校の協力を得た肢体不自由・聴覚障害特別支援学校避難訓練）

【（小学部）特別活動4 学校行事 （3）健康安全・体育的行事】他

- 2 ねらい**
- （1）特別支援学校児童生徒等
 - ・災害発生時に、生命及び身体の安全を確保できるよう避難させる。
 - ・地域の防災に協力する人々へ感謝の気持ちをもたせる。
 - （2）高等学校生徒
 - ・特別支援学校の児童生徒等の様子を知り、障害のある人の生活について関心をもたせる。
 - ・積極的に地域防災に貢献する意欲と態度を身につけさせる。

3 想定 地震発生後、特別支援学校で火災が発生し、延焼が広がったことから、近くの高等学校へ二次避難する。その際、高等学校に要請し、高等学校生徒の協力による避難訓練を行う。

- 4 指導計画**
- （1）事前指導 特別支援学校：安全な避難について知る。
高等学校：障害のある人について理解する。
 - （2）本時の指導 地震及び火災を想定した合同避難訓練を行なう。
 - （3）事後指導 合同避難訓練を終えた感想や反省点を、各学校で話し合う。

5 展開

（1）事前指導

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料等
特別支援学校 1 地震発生後に火事が起きたときの避難について知る。	○火災が起きたときの避難方法を説明する。	

高等学校 1 高等学校の総合的な学習の時間や特別活動において、障害に関する内容を取り扱い（車椅子体験や手話学習）、介護に関する知識及び技能について学ぶ。	○車椅子マニュアル、手話辞典、学校紹介パンフレット、DVD等を活用し、具体的に指導を行う。	・車椅子・手話辞典・パンフレット・DVD、プロジェクター、スクリーン等
--	--	--

（2）本時の指導

学習内容・活動	教職員の支援	資料
1 地震が発生した後、特別支援学校内で火災が発生したという想定で、一次避難場所に避難する。 2 初期消火に失敗し、火災の延焼が大きくなってきたため、二次避難場所である高等学校へ避難する。 3 特別支援学校幼児・児童・生徒とグループをつくる。 4 高等学校グラウンドへ避難・誘導する。 5 人員の点呼・確認を行う。 6 高等学校生徒と特別支援学校幼児・児童・生徒と交流を行う。 7 講評を聞く。（それぞれの校長あいさつ）	肢：緊急時車椅子を活用し速やかに避難できるよう配慮する。 聴：災害の状態、及び避難方法について、的確に伝える。（文字情報提示、手話通訳等） ○高等学校生徒及び教職員は一次避難場所に向かい、待機している。 ○円滑に移動できる組み合わせを作る。 ○本部員及び誘導担当の指示に従って行動する。 ○グループごとに避難訓練について振り返る中で交流を行う。 ○教職員が適宜手話通訳に入ったり、筆談したりすることにより、スムーズにコミュニケーションできるように配慮する。	・防災ずきん ・ヘルメット ・ハンカチ ・ストップウォッチ ・インカム ・緊急用名簿 ・本部旗 ・救急セット ・ホワイトボード ・文字カード ・筆記用具

（3）事後指導

学習内容・活動	教職員の支援	資料
1 それぞれの学校で、合同避難訓練実施後の感想や反省点を話し合う。	○それぞれの発達の段階や障害の状況にあわせて、合同避難訓練について振り返り、その意義について確認するようにする。	・感想文 ・感想カード ・避難訓練時の写真

6 評価

特別支援学校児童生徒等

（1）教職員や高校生の指示に従って、約束を守って落ち着いて避難することができたか。

- (2) 危険を回避したり、予測したりする力の基礎が培われたか。
- (3) 地域の防災に協力する高校生に感謝の気持ちをもつことができたか。

高等学校生徒

- (1) 障害のある人の生活について関心をもつことができたか。
- (2) 積極的に地域防災に貢献する意欲がもてたか。

教職員

- (1) 合同で実施する意義が深まるよう避難訓練、安全教育等を行うことができたか。
- (2) 児童生徒等の状態に即した内容の訓練ができたか。
- (3) 学校間の交流が進み、合同で行う良さが実感できたか。

特別支援学校展開6（肢体不自由）

防災マップ作り（地域探検）

1 教科等名

特別活動 ホームルーム活動（高等部）

【（高等部）特別活動 ホームルーム活動 （2）適応と成長及び健康安全】

2 ねらい

- （1）防災について興味をもたせる。
- （2）災害が起きた時にどのようなものが必要かを考えさせる。
- （3）地域や校内を回り、どのような防災設備があるか理解させる。
- （4）防災に携わっている人たちから話を聞き、防災についての知識を広げさせる。

3 指導計画

（6時間 展開例4～6／6）

事前学習 防災についての話（3時間）

- 災害が起きたらどうするか。どんなものが必要になるか。
- 校内の防災設備と役割（火災報知機、防災倉庫、消火器、消火栓、AEDなど）使用方法について学ぶ。
- 校内地図を見ながら防災設備を3班に分け見学する。（項目ごとに色分けする。例 火を消すもの・・・赤色、身を守るもの・・・桃色など）
- 地域の防災設備や場所（地図）について学び防災マップ作りのイメージをもつ。（消防署の方の話）
- 消防実演（消火器、C級ポンプ実演、はしご車）及び、消火器体験

防災マップ作り（3時間）

- オリエンテーリング及び取材（3班に分けて役割分担する）
- 防災マップ制作（地図に写真を貼ったり、取材のコメントを記載したりする）
- 取組の発表をする。

4 展 開

学習内容・活動	教職員の支援	資料など
1 事前学習で学んだ、災害が起きたらどうするか。学校の防災設備の位置などを確認し、学校周辺の災害設備を調べることを伝える。	○事前に学習した内容を振り返り、校内だけでなく、地域にも防災設備があることを知らせる。消防署の方が各班に1名一緒に来られることを知らせる。	校内で撮影した写真、P C
2 3班に分かれ調査場所（探検場所）の確認をする。	○地図を見せ、調査ルートを確認させる。	地図、シール、カメラ、防災探検隊ジャケット
3 それぞれのコースへ出発する。	○全員車椅子なので1対1対応	
4 事前に調べた防災設備のある場所を確認する。写真を撮る。	○探せないようであれば、言葉をかけて支援しできるだけ自分から探せるようにする。消防署の方と話ができるように支援し積極的に活動させる。	地図、マイク
5 まとめ 各班の発表	○地図など持てない場合は補助し、発表しやすいようにする。	

5 評 価

- (1) 防災について興味をもち考えたり調べたりできたか。
- (2) 地域にある防災設備にどのようなものがあるか知ることができたか。
- (3) 消防署の方と話す中で防災の知識を広げることができたか。

特別支援学校展開例7（知的障害）

地震に強い家にしよう

1 教科等名 生活単元学習（高等部）

2 ね ら い (1) 耐震補強で家が地震に強くなることを理解させる。
 (2) 家具の転倒防止の必要性和室内をより安全にするための方法を理解させる。

3 指導計画 (全4時間・展開例3／4)
 (1) 地震が起こったときの身の守り方（家、学校、車内、屋外、店内等）
 (2) 振動実験教材「紙ぶるる※」で家の耐震性を学ぶ
 次時の自宅の安全チェックの宿題の説明
 (3) 自宅室内の安全チェック（家具の配置や固定）（本時・授業参観）
 (4) 事後学習 自宅をどのように改造したか発表・単元の復習

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料
・宿題として、事前に自宅の居間及び寝室の間取りと家具の配置図を描いてくる。 1 本時の学習について知る 2 地震で室内がどうなるか ・地震時の室内の様子を見る 3 自宅室内の安全チェック ・○○先生の自宅チェック ・倒れる家具の固定方法を学ぶ ・参観家族と一緒に危険な場所、改善点、安全な一次避難場所を見つける。 4 発表する 5 次時（1ヶ月後）の予告	・保護者宛に宿題の依頼文書を配布 ・前時の学習内容を確認し、本時の学習内容について説明する。 ・映像を見せて本時の学習のイメージを持てるようにする。 ・仮想的な部屋を例示し、共通の図を使い安全チェックの仕方を確認する。 ・代表的な家具固定の方法を映像で示す。 ・代表者に発表してもらう。 ・自宅に帰って実際に安全チェックを行う。	・間取りと家具の配置を記入するワークシート ・地震時の室内を写した写真や動画 ・◇◇の自宅室内図 ・写真や図（テレビや家具の固定部分）

5 評 価

- (1) 耐震補強によって、家が揺れにくくなることが分かったか。
- (2) 自宅室内の危険なところに気づき、改善方法が分かったか。

6 そ の 他

- ・長期休暇前の参観日に行うと、自宅室内のリフォームを休み中の宿題として出し、長期休暇明けに事後学習を行うことができる（夏休み帳に写真で報告する様式を入れてもよい）。
- ・宿題では居間と寝室を描いてもらうが、授業ではより危ない部屋から取り組み、時間があれば次の部屋もやってみるようにする。
- ・※「紙ぶるる」<http://www.sharaku.nuac.nagoya-u.ac.jp/labofT/bururu/index.htm>

特別支援学校展開例8（知的障害）

防災マルチパーティションの作成

1 教科等名 美術科（高等部 選択教科）

2 ね ら い パーティションの作成を通して、地震の体験や震災後のニュースなどを思い出し、自分たちの身近におこる可能性のある災害に備える等の防災の意識を高めさせる。パーティションのデザインを考えることを通して、色や形が人の心に変化を与えることができることに気づかせるとともに、社会貢献の意識を高めさせる。

3 指導計画 (11時間 展開例7～10／11)

- (1) デザイン作成と決定 (3時間)
 (2) 色合いの作成と決定 (3時間)
 (3) 着色 (5時間)



4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料・材料
1 本時の学習内容を確認する。 ◇災害時の避難所をイメージ（明るい、落ちつく、安心、暖かい、好き）して作成してきたことを振り返りながら確認する。 2 三つのグループに分かれて、制作する。 ◇グループは、「アイディアを出して、絵や言葉で表現できる生徒」「教職員の支援を受けアイディアを出し、色を塗ることができる生徒」「教職員と一緒に好きなデザインを選んで、色を塗ることができる生徒」に分ける。 【下地塗りグループ】 ・板の全面に色を塗る。	○下絵の実物を見ながら説明する。  ○塗りやすいように、生徒一人一人に合った道具を用意する。また、塗り残しがないように、重ねて塗るよう言葉をかける。	・下絵の実物見本 ・避難所の写真  ・パーティション（木材・プラダン） ・ローラー ・エッジャー ・シート ・マジック ・下書きシート ・アクリル絵の具 ・筆 ・刷毛 ・マスキングテープ

【下書き、色塗りグループ】 ・パーティションに、デザイン画を基に色を塗る。 	○色を間違えないように、デザイン画とパーティションに番号を振っておき、塗る色を分担するように言葉をかける。 ○はみ出さないようにていねいに塗るように言葉をかける。	 
【なぞり、色塗りグループ】 ・パーティションに、指定された色を塗る。  3 片付けをする。 4 本時の成果をグループごとに発表する。	○色の名前と番号を振っておき、自分で塗る色を確認できるようにする。 ○はみ出してもいいようにマスキングをしておく。 ○分担して片付けをするよう言葉をかける。 ○発表する生徒を決めておくよう言葉をかける。	 

5 評価

- (1) 自信をもって、色を塗ることができたか。
- (2) 明るい、安心などをイメージしながら色を塗ることができたか。
- (3) 災害時に役に立つ意識をイメージすることができたか。

6 その他

◎平常時には教室や体育の授業で使用し、災害時には避難所の仕切りとして使用する。

○教室で使用するサイズ（高さ115cm 横幅90cm）

・机で学習している生徒を上から見て様子が分かる高さ

○体育や行事で使用するサイズ（高さ78cm 横幅180cm）

・三輪車等の乗り物に乗った状態の児童の頭が見える高さ



特別支援学校展開例9（知的障害）

災害時の「ほうれんそう」～緊急時のコミュニケーション～

1 教科等名 自立活動（高等部 通学時にスクールバスを利用していない生徒）

【自立活動 内容（4）環境の把握】

- 2 ねらい**
- （1）災害時に自分の身を守るために必要なことを考えさせる。
 - （2）自分の言葉や表現で、意見を発表することができるようにする。
 - （3）他者の気持ちを知ることができるようにする。

- 3 指導計画**
- （2時間 展開例2／2）
 - （1）釜石東中学校の生徒による
体験発表のビデオ鑑賞 （1時間）
 - （2）災害時の「ほうれんそう」（1時間）



4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料・材料
1 緊急地震速報が流れ避難行動をとる。 ◇電灯を避け、その場でかがむ生徒、ドアを開け外へ出ようとする生徒、友だちの手を引き逃げる生徒。どの行動も正解であり、その時の状況により最善が尽くせるように話をする。 2 本時の学習内容について知る。 ◇震災時の振り返り話をする。（余震で電車がストップしてしまった時に、すぐに電話連絡をしてくれた生徒の話） 3 5名ずつ6グループに分かれる。 ・自由な発言やアイデアを発表する。 ◇設定「朝の通学中」「家で就寝中」「家で入浴中」に地震が起きたら Ⅰ 自分でどうする？ 次に… Ⅱ 誰に、どうやって助けを求める？ ・代表者が発表する	○生徒の行動を見守りながら、安全に配慮する。 ○映像等を用いて分かりやすく伝える。 ○話がしやすいように、同じ通学方法（自転車、JR）の生徒で集まるようにする。 ○発表内容を紙に大きく書くようにする。 ○発表係、紙を持つ係を決めるようにする。	・緊急地震速報音源（緊急地震速報利用者協議会） ・プロジェクター ・スクリーン ・マイク ・PC ・記入用紙 ・マジック ・役割がわかる名札

4 役割演技をする。 ◇設定 下校途中に見つけた「倒れている人」「通りすがりの人」 ・代表者二名が発表する。 ・感想を聞く。  5 教職員のまとめを聞く。 ◇今まで教わっていないことに遭遇した時や(火山や竜巻、ゲリラ雷雨)、既成概念にとらわれないで行動しなければならない時(横断歩道青なら渡ってOKか)について、事例を交えて話をする。	○役割の希望を聞く。 ○役割の名札をつけて行う。 ○それぞれについて感想を聞く(グループ毎)。 ○代表者を決めておく。特に意欲的に取り組んだ生徒や、普段発表する機会が少ない生徒を選ぶ。 ○補足が必要な生徒には、個別に対応をする。	
---	--	--

5 評価

- (1) 災害時に自分の身を守るために必要なことを考えることができたか。
- (2) 自分の言葉や表現で、意見を発表することができたか。
- (3) 他者の気持ちを知ることができたか。

6 その他

参考資料

- ・釜石市教育委員会・釜石市市民部防災課・群馬大学災害社会工学研究室(2010)
「釜石市津波防災教育のための手引き」



特別支援学校展開例 10（知的障害）

全校児童生徒集会～防災をテーマとした地域との交流～

1 教科等名

特別活動 学校行事（小・中・高等部）

【（小学部）特別活動4 学校行事（3）健康安全・体育的行事】他

2 ねらい

（1）縦割りグループで協力して避難できるようにする。

（2）地域の人々と交流を図りながら防災に関する意識を高めさせる。

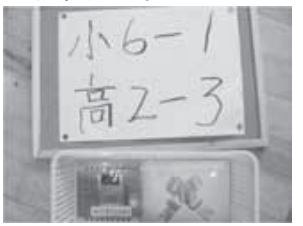
3 指導計画

（3時間 展開例3／3）

（1）児童生徒会役員による長寿会への招待状作成等（2時間）

（2）全校児童生徒集会（防災集会）（1時間）

4 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援	資料・材料
1 校内放送で集会の始まりのアナウンスをする。（児童生徒会役員） 2 体育館に姉妹学級（※）で集合する。 ・各姉妹学級をグループ名で呼び、出欠確認をする。 ・はじめの言葉（児童生徒会役員） ・校長先生の話 3 長寿会、ボランティア部会の方々を各姉妹学級の代表者が迎えに行く。自己紹介をする。 4 姉妹学級ゲーム（避難グッズを探せ） ・ゲーム説明（児童生徒会役員） ・姉妹学級に分かれ、グループ毎に指令されている教室へ行く。 ・校内放送で緊急放送（地震）が流れたら、安全な場所に避難する。 ・避難解除放送が流れたら、教室より、非常時持ち出しグッズを取って体育館に戻る。 ・体育館に戻り、ステージ下の指示された箇所に持ってきた非常時持ち出しグッズを置く。	○児童生徒会役員は早めに体育館に集合し、準備を行う。 ○名札（ガムテープ）を胸に付け、姉妹学級は妹学級を迎えに行き、一緒に体育館に集合する。 ○役員が各姉妹学級のプラカードを持って立たせ、それを目印に集合する。 ○グループ名を呼ぶので、大きな声で返事をさせ、復唱などをして始まりがわかりやすいようにする。 ○各姉妹学級の座る場所に写真カードを置いておき、その写真と同じ色のリボンを付けている方を迎えに行く。 ○児童生徒会役員も姉妹学級に入る。 ○安全な場所で待機する。 ○指令場所にて避難グッズを取り次第、体育館に安全に気をつけ戻ってくる。 ○グループによって体育館に戻ってくる時間に差が出るが、定位置にて姉妹学級で待機している。	・全員の名札 ・パイプイスとリボン（地域の方） ・プラカード  ・指令カード（グッズの場所） ・写真カード（避難グッズ） ・避難グッズ（実物） ・緊急地震速報音源（緊急地震速報利用者協議会）

◇勝敗を競うゲームではなく、交流を図るためのゲームである。移動の際、ペアを作ったり、外部の方と話をしたりして親睦を深めるようにする。 5 非常食を食べる。 ・食べている間、児童生徒会役員の質問に答える。 6 終わりの会 ・長寿会、ボランティア部会の方から感想を聞く。 ・長寿会、ボランティア部会の退場。 ・次回予告（児童生徒会役員） ・終わりの言葉（児童生徒会役員）	○アレルギー対応等、個別対応が必要な生徒は、担任が用意をする。 ○緊急放送が流れた際、どこにいたのか、どのように避難をしたかなどに答える（全グループから話しを聞く） ○拍手で送る。 ○姉学級は妹学級を教室まで送る。	 ・試食用非常食
--	--	--

5 評価

- （１）お互いの名前を覚え、交流をすることができたか。
- （２）協力して安全に避難することができたか。
- （３）防災や安全について考える機会になったか。



6 その他

（実際に実践した学校における行動や感想）

あるグループは、廊下にいる時に緊急地震速報が流れ、その場に座り頭を守った。高等部生徒が小学部児童の頭を守りながら自分の頭を守る姿があった。あるグループでは、中学部の生徒が、「〇〇さん、ここに隠れて！」と机から椅子を引き出して長寿会の方と一緒に机の下に避難する姿が見られた。非常食の試食では、普段、お菓子を食べない小学部の児童が、皆が食べるのを見ながら自分の口へ入れた。緊急地震速報を流すことを事前に伝えておいたことで、気持ちが落ち着かなくなる児童生徒もなく、「また一緒に活動をしたい。」という感想が、児童生徒、地域の方々の双方から聞かれた。

※姉妹学級・・・小学部と中学部、中学部と高等部というように組んだ縦割りグループ

特別支援学校展開例 11（知的障害）

総合防災訓練

- 1 教科等名** 特別活動 学校行事（小学部、中学部、高等部）
【（小学部）特別活動4 学校行事 （3）健康安全・体育的行事】他
- 2 ねらい** 大地震等の災害に備え、児童生徒が地域の協力を得て、自らの安全を確保できるようにする。
- 3 想定** 児童生徒が登校後、大地震が発生し、防災委員会が招集され、児童・生徒の保護者への引き渡しを決定したと想定する。
- 4 指導計画** （1）大地震を想定した避難訓練と自衛防災組織による児童生徒の救出及び保護者への引渡し
（2）自衛消防組織及び地域の連携による消火訓練実施

5 展 開

学習内容・活動 ◇主な発問等	教職員の支援等	資料
1 緊急地震速報の放送		放送機器
2 地震発生 of 放送で安全を確保する。	安全確保のできない児童生徒を安全な場所へ避難させる。	
3 揺れが収まったら放送の指示に従って避難開始する。	校内の安全確認（担当者は職員室管理職へ連絡）	本部設置（グラウンド） 防災ずきん（ヘルメット）
4 指示された場所に避難集合する。	人員点呼 全員の無事を確認する。	出席簿、救護グッズ
5 行方不明者捜索 協力要請（町会、近隣老人ホーム）、		
6 不明者の救出が終わるまでその場で待つ。	待てるように指示、支援する	担架 トランシーバー
7 救出の確認		
8 講評	校長の話が聞けるように支援する。	
9 防災委員会の招集（余震の状況を判断し引渡しを決定）（全校放送にて教職員に通知）	生徒に引き渡し訓練の実施を伝える。（不安定児童生徒の確認と適切な指示）	

10 子ども安全連絡網で家庭へ連絡	随時、連絡確認件数を把握。	
11 消火訓練の実施（見学場所移動） 町会消火隊及び消防団、消防署による合同消火訓練の実施	出火場所の確認 児童生徒の見学場所移動ができるように支援する。	
12 引渡し開始	受付で保護者を確認し、不審者の侵入を防ぐ 引渡し状況を放送で報告 水消火器、屋内消火栓、消火隊ポンプ さすまた等の位置確認	
13 一人通学者の下校を開始 自宅に到着したら学校に電話連絡を入れる。	最終下校者の確認後 終了	 さすまた 終了の放送

6 評価

- （１）状況を判断し落ち着いて避難する事ができたか。
- （２）地域との連携が予定通り行われ、実際の災害が起こったときの協力体制が確認できたか。
- （３）保護者への引渡しは時間通り混乱なく実施できたか。

特別支援学校展開例 12（病弱）

地震・火災を想定した避難訓練

1 教科等名

特別活動 学校行事

【(小学部) 特別活動 4 学校行事 (3) 健康安全・体育的行事】他

2 ねらい

- (1) 地震後に火災の発生に際して、児童生徒が身の安全を図ることができるようにする。
- (2) 放送をしっかりと聞き、自ら机の下へ身を隠したり、防災ずきんやハンカチを活用して安全に避難できるようにする。

3 指導計画

- (1) 事前の指導 避難経路について学習する。(学級の時間)
- (2) 本時の指導 放送の指示に従い避難する。訓練について振り返り避難方法について確認する。(1時間)

4 展 開

学習内容・活動	教職員の支援	資料等
1 地震の発生を知る。 ・地震発生の音(1分)を聞く。 ・非常ベルが鳴ったら(30秒)放送を聞いて机の下にもぐる。	○授業を中断、放送に注目するように促し、出口を確保し、机にもぐる指示を出す。	・放送機器 地震用CD
2 避難をする。 ・火災発生の通報。 「ただ今、職員室から火災発生、防災頭巾をかぶり校庭へ避難しなさい。」 ・教職員の指示を聞いてハンカチを口に当て、腰を低くして、校庭に速やかに移動する。	○火災通報を正しく聞けるように指導する。 ○防災ずきんを準備させ、正しく付けさせる。 ○火元を避けて避難する経路を伝え、避難させる。 ○上履きのまま集合するように児童に指示する。 ○初期消火班は、初期消火を行う。 ○校内巡視点検を行う。 ○校庭に本部を設置し、点呼を行う。 ○人数を素早く確認し学級ごとに本部に報告する。集合後は静かに指示を待つようにする。	・防災ずきん、ハンカチ ・本部の旗、救急用具、拡声器
3 講評を聞く。(校長)		
4 避難の仕方についてまとめの学習をする。	○地震発生後の火災の被害のほかに、津波の被害についてもあわせて理解させ、避難の仕方をまとめる。	・DVDセット一式

5 評 価

児 童（１）地震発生時、火災発生時に身の安全を図りながら適切な行動がとれたか。

（２）地震に対する理解が深まり、防災意識が高まったか。

教職員（１）計画及び内容が適切であったか。